応用心理学のクロスロード

特集 日本応用心理学会第86回大会報告

CROSSROAD ESSAY 私と応用心理学

12

2020 March

JAAP 日本応用心理学会

3 機関誌編集委員会

軽部　幸浩

早いもので、昨年7月1日に新・電子投稿システムとして稼働を始めたScholarOne Manuscriptsが、すでに1年以上の時間を経過し大したトラブルにも見舞われることなく稼働しております。この間、会員の皆様より多くの論文を御投稿いただき、その数は優に50本を超えようとしています。機関誌編集委員会委員（編集委員）の先生方のおかげで、査読作業も遅滞なく順調に進んでおります。また、貴重なお時間を割いて投稿論文の審査をいただいている査読者の諸先生方には、その御苦労を考えると頭が下がる思いです。

ところで、今回の『応用心理学研究』の表紙の色は「紫」でした。『応用心理学研究』の表紙は毎年色を変えて、「青色」→「紫色」→「赤色」→「黄色」→「緑色」の順番とし、「緑色」の次は「青色」に戻ります。1年ごとに変わる表紙の色をお楽しみください。

さて、今年はもう一つ新しい報告がございます。機関誌編集委員会だけではなく、日本応用心理学会としての念願が叶い、『応用心理学研究』第44巻1号～3号までがJ-STAGEに登載されました。そして2019年8月15日に初回公開され、正式な運用開始となりましたこと、会員の皆様にご報告いたします。

これからも会員サービス向上を考えて、機関誌編集委員会は活動をして参ります。会員の皆様におかれましては、何卒ご協力の程よろしくお願い申し上げます。

4 広報委員会

田中　真介　広報委員会 委員長

今期は、田中真介（委員長）、佐々木美智子（副委員長）、来田宣幸（第11号編集長）、川地亜弥子（第12号編集長）、張貞京（第13号編集長）の5名で担当しています。『応用心理学のクロスロード』誌の編集と発行では、本誌が「さまざまな分野の人々の出会いと発見の広場」となることを大切にしてきました。次号（第13号、2021年3月発刊予定）では、次のようなコーナーを準備して皆様の原稿を募集しています。

●募集コーナー：①「巻頭言」（1000～1200字）、②「大会の感想」（400～800字）、③「ホープ登場」：大学院生、若手研究者（800～1000字）、④「大学探訪・職場探訪」（800～2000字）、⑤「CROSSROAD ESSAY」（3000字）、⑥「海外最新事情」（800～1000字）、⑦「おすすめのDVD紹介（映画紹介）」（800～1000字）、⑧「BOOK REVIEW（本との出会い）」（400字）、⑨「応用心理士の現場」（800～1000字）。その他、本誌への感想やメッセージなど自由にご投稿ください。

●原稿締め切り：2020年9月30日（水）

●応募方法：原稿には、連絡先（住所、電話、メールアドレス、所属）を記載して、メール添付ファイルでお送りください。送り先は、学会ホームページでご案内いたします。

ることができました。

最後にはなりますが、今回日本応用心理学会に参加した3チームの研究を発表する機会をいただき、またご指導いただいた井上先生、当日応援に来てくださった石田先生、私たちの研究にアドバイスをくださった先生方に感謝いたしております。先生方からいただいたアドバイスを参考にますます研究に励んで参ります。

馬渕　里都（まぶち・りと）／ 東京都私立文京学院大学女子高等学校出身。現在、日本大学商学部商業学科２年トレード&エコノミーコース。井上裕珠ゼミナールで消費者行動論を社会心理学の観点から勉強している。

教育発表を見学して

石田　大典
（日本大学商学部）

日本応用心理学会第86回大会において同僚の井上裕珠先生（日本大学商学部）が教育発表を行うと聞いたので、学生たちに発破をかけようと思い、ポスター発表を見学させていただきました。本稿では、学生たちがポスター発表をする様子を見ていた時に感じたことについて述べさせていただきたいと思います。

会場でまず驚いたのは、教育発表のポスターが先生方の研究発表と同じ場所に掲示されていたことです。学生たちは、ポスターの掲示場所を確認すると、「すごい」や「やばい」などと言って恐縮しているようでした。それと同時に、同じ場所に掲示されることに刺激され、研究成果を聞いてもらおうと意欲的にもなっていました。

学生の研究発表に対して、先生方が真剣に耳を傾けてくださり、そして多くのアドバイスをくださったことも印象的でした。特に、分析結果を解釈するうえでの新たな視点や実験設計の修正案などのアドバイスはまるで大学院生への指導のようでした。学生たちは現在、先生方のアドバイスを基に分析結果の議論を精緻化したり、新たな実験を計画したりしているようです。

今回の発表は、学生たちにとってかけがえのない経験であり、大きく成長できたのではないかと思います。特に、研究に対するモチベーションや論理的に物事を説明するコミュニケーション力は高まったのではないでしょうか。研究発表の場である学会において、大学生の教育発表の場も提供しようという学会の取り組みや、後進を育成しようとする先生方の姿勢に大きな感銘を受けました。教育発表を行った学生たちには、研究の面白さを感じて、１人でも多く研究者を目指してくれたらと願っております。また、教育発表を行うゼミや研究室が今後ますます増えることを期待しております。

石田　大典（いしだ・だいすけ）／ 1980年 広島生まれ。早稲田大学大学院商学研究科博士後期課程単位取得退学。早稲田大学商学学術院助手および助教、帝京大学経済学部助教および講師を経て、2018年４月より日本大学商学部准教授。専門はマーケティングと消費者行動。

研究発表（口頭発表）

8月25日（日）
10：00 ～ 14：40　2202教室
座長：**軽部幸浩・伊坂裕子**

大会２日目の口頭発表②では、５件の発表がありました。①静間健人氏・土田昭司氏「自己効力感と２種類の貢献感が援助要請意図に及ぼす影響」、②原健之氏「職場雰囲気がワーク・ファミリー・バランスを媒介して仕事継続意欲に及ぼす影響 ―生涯発達的観点から―」、③宮川裕基氏・谷口淳一氏「セルフコンパッションの高い人ほ

5 企画委員会

臼井　伸之介

2019年度企画委員会は昨年度に引き続き、臼井伸之介（委員長、大阪大学）、いとうたけひこ（和光大学）、桐生正幸（東洋大学）、篠原 一光（大阪大学）、谷口淳一（帝塚山大学）、中井宏（大阪大学）の6名が担当しました。企画委員会では本年度の活動として、以下を実施しています。

1. 2019年度学会研修会（於　第86回大会）

⑴ **研修会A**（8月24日）

講師：高 史明（神奈川大学）

演題：「インターネット上の言説の分析：偏見・差別研究を題材に」

司会：谷口 淳一（帝塚山大学）

⑵ **研修会B**（8月25日）

講師：内藤 哲雄（明治学院大学国際平和研究所）

演題：「PAC分析の理論と実践」

司会：いとう たけひこ（和光大学）

2. 2019年度企画委員会公開シンポジウム

テーマ：「妖怪と心理学：私たちが得たもの失ったもの」

日　時：2019年11月30日（土）13時30分～16時

会　場：東洋大学　白山キャンパス（文京区白山5-28-20）

企　画：日本応用心理学会企画委員会、協賛：㈱社会行動研究会

司　会：桐生 正幸（東洋大学・㈱社会行動研究会）

（趣旨）日本の「妖怪」は、世界でも類を見ないほど多様性に溢れ、社会や文化に溶け込んでいた。しかしながら、明治以降「妖怪」の社会的役割や位置づけが変化し、現代人の心理的側面にも変容をもたらしたと考えられる。本シンポジウムでは、「妖怪」と心の関連を検討し、現代社会で喪失し、また新たに獲得した「妖怪」を深く考察してみたい。

話題提供者：

軽部 幸浩（日本体育大学）

高橋 綾子（東洋大学）

飯倉 義之（國學院大學）

指定討論者：

吉川 肇子（慶応義塾大学）

なお、2018年度公開シンポジウム（テーマ「自動運転が社会的に受け入れられるために」）は2018年12月15日（土）に立正大学品川キャンパスで開催されました（参加者70名）。シンポジウムの内容については、機関誌応用心理学研究45巻第2号に詳しく掲載されます。

第87回大会に向けて

来田　宣幸
（京都工芸繊維大学）

2020年８月29日（土）・30日（日）に京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパスにて日本応用心理学会第87回大会を開催いたします。京都での開催は、1998年に龍谷大学で開催された第65回大会（大会委員長：田中昌人先生）、2010年に京都大学で開催された第77回大会（大会委員長：田中真介先生）以来10年ぶりとなります。

この３つの大学の所在地を確認しますと、

・龍谷大学深草キャンパス：東経135度45分58.35秒、北緯34度57分48.19秒、標高22.9m
・京都大学吉田南キャンパス：東経135度46分49.92秒、北緯35度01分28.12秒、標高56.2m
・京都工芸繊維大学松ヶ崎キャンパス：東経135度46分57.38秒、北緯35度02分58.41秒、標高72.7mと、少しずつ北へ（５分／22年）、そしてほんのわずか東へ（１分／22年）、さらにちょびっとだけ宇宙の近くへ（50m／22年）進んできました（京都は、北の方ほど標高が高いです）。

京都の地理に詳しい方はご存知かと思いますが、平安京は東西4.5km、南北5.2kmの長方形をしており、北の端にある一条戻橋は「東経135度45分07秒、北緯35度１分34.6秒」、南の端の羅城門は「東経135度44分33.3秒、北緯34度58分45.4秒」あたりになります。そうです。これまでの学会大会は、平安京の上をきれいに避けるようにやや東側を取って北上してきました。

数字で表現すると、理解しやすくなるようでいて、直感的な理解が難しくなるのかもしれません。ふわっとした「平安京の上を避けて」のような表現が伝えるイメージにも大きな価値がありそうですが、それでいて、伝え切れていない情報があるのもまた事実です。

情報をどのように伝えると良いのか…。近年、デジタルの時代になり、アバターが学会発表のプレゼンをおこなってしまう仮想現実の実現も間近かもしれません。ARやVRを活用すれば、移動せずに研究の公表や交流も促進され、実質的に学会大会を開催することも可能かもしれません。

そのような時代の中で、実際に人が集まる学会大会では何ができるのか、参加していただいた人に開催大学は何を提供することができるのか、開催される日（2020年８月）まで、とことん考え抜きつつ、準備を進めていこうと思います。人と人がリアルで集まって生み出される価値創生に少しでも貢献できれば、この上ない喜びです。さまざまな仕掛けを準備していきたいと思っていますので、ぜひ京都まで足をお運びいただけますよう、よろしくお願いいたします。今回も、「若手研究発表」を継続します。学部生の方も発表可能です。お声かけいただけると幸いです。

なお、工繊大のキャンパスからは世界遺産の比叡山を間近にぞむことができます。比叡山の山頂は「東経135度50分04秒、北緯35度03分57秒、標高848.3m」。工繊大は比叡山から最も近い国立大学です。直線距離にして4.62kmですが、標高差は775.6m、大会の合間にちょっと散歩するには本格的な山登りになります。

ちなみに、鴨川をどりで知られている先斗町歌舞練場（北緯35度00分29秒、東経135度46分16秒、標高38.9m）までの直線距離は4.62kmと比叡山山頂までとまったく同じですが、所要時間は遥かに短いです（徒歩１時間、バス・地下鉄30分、タクシー15分）。

最後に、京都の夏は暑いです。８月29日の過去の最高気温をみますと、2019年：32.8度、2018年：36.2度、2017年：35.0度、2016年：29.1度、2015年：29.6度、2014年：30.0度、2013年：33.9度…となっています。暑熱対策につきましても心づもりをお願いいたします。

（＊編集部より：新型ウイルス等への対応のため、大会の開催時期は変更される場合があります。学会ホームページで随時お知らせいたします。）

来田　宣幸（きだ・のりゆき）／ 2003年 京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程研究指導認定退学。博士（人間・環境学）。現在、京都工芸繊維大学基盤科学系教授。バイオメカニクス、運動生理学、スポーツ心理学などの分野を中心としてヒトを対象とした非侵襲的手法による研究に従事。

第86回大会を終えて

外島　裕
（日本大学商学部）

日本応用心理学会第86回大会は、2019年８月24日（土）・25日（日）の２日間、日本大学商学部（世田谷区砧）において開催されました。ご案内のように、日本大学と日本応用心理学会とは極めてご縁が深く、1946年に日本大学の心理学研究室の創設者である渡辺徹先生により戦後の復興第１回大会が開催されました。さらに、2004年の第71回大会は本学商学部で開かせていただきました。

さて、最寄りの祖師ヶ谷大蔵駅の周辺は、以前に円谷英二さんが住んでいた経緯から、ウルトラマン商店街と称しています。商学部のキャンパスまでの街灯はウルトラマンをイメージするような形で、商店街角のアーチ上にはウルトラマンが飛んでいます。お気づきになりましたでしょうか。また、ゴジラで有名な東宝スタジオや東京メディアシティー等があります。世田谷にしては比較的庶民的な雰囲気の街・映像の街でもあります。ほんの少し歩くと、広い砧公園、公園の奥には世田谷美術館などもあります。ご研究の合間に、散策などなさいましたでしょうか。

大会当日は、季節がら気がかりの天候の不都合はなく、開催することが出来ました。しかしその後、９月10月と、地球温暖化の影響か、大型の台風に各地が襲われ、多くの被害が生じました。本学会の関係の皆様のみならず、ご不安、ご被害をうけられました皆様に、心よりのお見舞いを申し上げます。

▌理事会

大会前日８月23日（金）の15時より商学部本館31会議室において理事会が開催されました。理事、幹事、名誉会員の諸先生方が出席されました。理事長挨拶、大会委員長挨拶の後、各理事、名誉会員の自己紹介がなされました。日本応用心理学会の組織風土を表わすように、和やかな雰囲気が醸し出されていました。その後、約２時間にわたり、各委員会の報告、本学会の発展課題などについて、丁寧な討議がおこなわれました。

理事会終了後は、慣例によりまして、本学商学部キャンパスから近い成城学園前駅ビル内のレストランにて、理事懇親会を開催いたしました。会では、名誉会員の森下高治先生に乾杯のご発声を頂きました。また、本学会顧問弁護士の金井重彦先生、芝口祥史先生もご参加くださいました。ご出席の先生方の懇親とご研究の交流が深まったことと存じます。

▌研究発表

今大会においても、昨年度の大阪大学での発表形式を踏襲して、口頭発表とポスター発表をおこないました。

口頭発表は、１日目と２日目の午前中に、各１セッションとなりました。合計９演題のご発表でした。それぞれ、活発な質疑がなされました。効果的な運営を頂きました、座長をお勤めの、河野千佳先生、片岡大輔先生、軽部幸浩先生、伊坂裕子先生に深く御礼申し上げます。

ポスター発表は、１日目は15時45分から17時45分、２日目は14時45分から16時45分におこなわれました。１日目32演題、２日目41演題、合計73演題となりました。会場はキャンパス内食堂マロニエを用意いたしました。多くの先生方にご参加いただき、時には肩を寄せ合う雰囲気ともなりましたが、熱心な盛り上がりとなったと存じます。

▌教育発表

今回の大会の企画として、学部学生による「教

「応用心理学における『労働』研究のこれまでとこれから」を終えて

企画者：大橋　信夫　　藤田　主一
（日本体育大学）

日本応用心理学会（以下、本学会）第86回大会において、標題の自主企画ワークショップ（WS）を開催しました。初日の午前中にもかかわらず、多くの皆様にご参加いただき、企画者として大変喜んでおります（以下敬称略です）。

ところで、本学会の前身は産業・労働関係の研究発表に始まったと言っても過言ではありません。1927（昭和２）年４月、京都大学で第１回研究会が開催されました。内容は「テスト」に研究発表です。第５回(1929年５月)と第９回(1931年６月)の研究会は、倉敷労働科学研究所において、大会長は桐原葆見です。東京の第1回は1931年６月で、開催は東京帝国大学です。このような本学会の歴史的な経緯を前提に、今大会での表題WSは、大変意義あるものと思います。

WS開催にあたり、企画者を代表して大橋信夫より挨拶と企画趣旨が紹介され、司会者の藤田主一による登壇者の紹介の後、越河六郎、尾入正哲の両氏による話題提供が行われました。発表内容の概略は、大会発表論文集を通読していただきたいと思います。越河は、労働研究の「これまで」を振り返り、それは桐原の「労働科学は真に合理的な労働と生活の条件を求めてやまない」という視点からなされている研究活動であると述べました。何らかの思想に偏したり、時代の主潮に流されることなく、常に学問的なレベルを目指しての研究が大切であり、そのために極めて重要な研究の方向性は現場を大切にすることであると主張しました。尾入は、労働研究の「これから」を見通し、「それは労働組合や労働者福祉という意味だけではなく、労働者・作業者目線からの職場に関する研究ということになろう。また高齢者や外国人の労働も重要な研究対象になるであろう」と述べました。具体的な仕事の内容・作業者の個人特性・設備や作業環境の状況などを幅広く見渡すようなセンスを持つ人材を育てることが、「これから」の労働科学の重要な任務であろうとまとめました。

両氏の話題提供を受けて、指定討論者の角山剛は、産業心理学が組織に働く人間の行動に注目した組織行動を一方の軸として発展したことを述べ、組織を取り巻く変化の中で「労働」をどのような視点で捉えていくのかについて、的確な論点と質問がなされました。その後、フロアから有識者による質問が相次ぎ、話題提供者と指定討論者を交えてディスカッションが行われ、最後に企画者の大橋から全体をとおしての感想がありました。WSは設定時間をオーバーするほど熱心に議論が重ねられ、登壇者・参加者ともども大変有意義な時間を共有することができました。

大橋　信夫（おおはし・のぶお）／ 博士（心理学）。応用心理士。人間工学専門家。専門は人間工学・産業心理学・労働科学。日本応用心理学会名誉会員。産業・組織心理学会名誉会員。日本人間工学会名誉会員。

藤田　主一（ふじた・しゅいち）／ 日本体育大学教授。日本応用心理学会理事長。専門は教育心理学・教育臨床心理学。一般社団法人日本心理学諸学会連合心理学検定局長。第80回記念大会委員長。応用心理士。

となっています。各章の構成は本学会のその領域の専門家に編集を依頼し、編集者による概説と20トピック（項目）から成り、全800ページの大著となる予定です。各トピックは学会会員を中心とする総勢300人を超える執筆者に依頼し、最新の応用心理学の研究を盛り込んだ内容となっています。このハンドブックの刊行は、本学会の新たなページを開くものと確信しております。

なお、出版社と相談し、本学会会員の皆様には割引価格で購入していただけるように取り計らう予定です。ぜひ本書を手に取っていただき、座右の書として頂ければ幸いです。

9

学会史編纂委員会

藤田　主一　日本応用心理学会 理事長

日本応用心理学会（以下、本学会）学会史編纂委員会は、2016年度より理事長直属の委員会として発足し、今日に至っています。したがいまして、本委員会は今後とも理事長が委員長を兼務することになります。

すでにホームページ等で公表しているように、本学会は日本心理学会（1927年設立）と並んで長い歴史と伝統を有する学会です。その歴史をさかのぼると、東京在住の心理学者が中心となり1931年６月に「応用心理学会」が誕生していますが、これ以前の1927年には、関西において「関西応用心理学会」が立ち上がっており、1934年４月には京都帝国大学で関西と東京の合同大会が開催されています。さらに、1936年４月の大会より「応用心理学会」に「日本」を冠して、今日の「日本応用心理学会」の名称が確立しました。本学会の会員は、設立当初以来、日本の心理学界を代表する心理学者のお名前ばかりです。よく「基礎」と「応用」と言われますが、「応用心理学」が心理学の本流であることを誇りに思います。

そうしますと、本学会設立の年月をいずれの年代に求めるのかは難しいところですが、私たちの代から、早めに今後の100周年に向けたさまざまな準備を開始する必要があります。そのため、委員会ではアーカイブという視点から、本学会の歴史と資料を散逸しないように整備していくことになりました。基本的には、①本学会に関わる資料・史料の蒐集と編纂、②名誉会員へのインタビュー、③蒐集した成果の公表、④『日本応用心理学会100年史』の発行、などを目的にします。特に②のインタビューに関しては、ご本人の同意を得て、これまでに、肥田野直先生（1994年名誉会員）、高嶋正士先生（1995年同）、山岡淳先生（1999年同）、越河六郎先生（2002年同）、長塚康弘先生（2005年同）、大橋信夫先生（2009年同）にインタビューし、本学会にまつわる貴重なお話しを承っています。いずれ会員の皆様にもお伝えする予定です。

今後、本学会を支えてくださる会員の皆様には、本学会の歴史の活動に大きな関心を持っていただきながら、併せて学会史の編纂にご協力くださいますよう、お願い申し上げる次第です。

ど就職活動の不採用に挫けないのか：2017年度及び2018年度就職活動生を対象とした前向き研究」、④軽部幸浩・石岡綾香氏・桐生正幸氏「犯罪に関するイメージ調査 —SCITの質問項目の検討—」、⑤上瀬由美子氏「刑務所と地域の連携：カナダ連邦・州刑務所の地域連携事例の報告」。

①災害事故効力感に関する発表では、「集団的貢献感が高くなると、家族や防災組織に相談する意図が高くなる」こと、②産業・組織に関する発表では、「職場雰囲気が良いと感じているとワーク・ファミリー・バランスがとれている状態と認知され、それが仕事継続意欲を高める」。③セルフコンパッションに関する発表では、安易に一般化はできないものの、「不採用に対処するためには、自己に対する肯定的な姿勢というセルフコンパッションと自尊心が必要」。犯罪・矯正に関する発表では、④「CIT検査項目作成に関して活用の可能性のある新しい試み」、また、⑤「カナダ連邦・州刑務所における地域連携事例」が報告されました。どれもとても興味深いテーマで、発表者が発表を終わるや否や、すぐにフロアからの質問や意見があり、緊張感のある白熱した口頭発表の場となりました。データ処理に関して質問や別の視点からのデータ分析の切り口の意見など、発表者だけでなく、多様な他の分野からの参加者にとっても有益な議論の場になったのではないかと思います。

ポスター発表も多くの先生方にご覧いただく良い提示方法と思いますが、口頭発表もまた違った意味で、多くの方々に研究成果を発表できる優れた方法ではないかと考えています。今回ポスター発表をされた先生方も、今後の大会で口頭発表の機会があるときには、ぜひチャレンジされてみてはいかがでしょうか？

軽部　幸浩（かるべ・ゆきひろ）／ 日本体育大学体育学部助教。日本応用心理学会常任理事、日本心理学会代議員など。専門は、精神生理学、人格心理学。現在は、より客観的な立場をとった「ポリグラフ検査」についての研究をおこなっている。

伊坂　裕子（いさか・ひろこ）／ 1983年、日本大学文理学部心理学科 卒業、2002年～現在、日本大学国際関係学部 准教授。1992年、博士（心理学）。専門は、パーソナリティ、社会的認知、文化心理学。

「教育発表」なる試みの継続具現への提案

南　隆男
（慶應義塾大学）

「十年一昔」（じゅうねん　ひとむかし）とは言うけれど、今次大会の会場の日本大学商学部を、15年ぶりに“再訪”して、わたしは、とてもビックリしました。

2004年９月に開催された第71回大会も、今回に同じく、日本大学商学部が会場でした。けっこうな雨に降られたりもして、そのときの、何となくクスんだ感じのキャンパス光景からは、思いもよらぬ、モダーンで明るく開放的な感じに満ちあふれた、2019年は令和の代の日本大学商学部！

今回は天気も良好で、わたしは、研究発表を聴くよりも、「勇気の泉」の水をば試飲してみたり、キャンパスのあちこちを“探検”しては、そこで遭遇した学生の皆さんと話しを取り交わしては、いろいろのことを感じ考えていたのでありました。しかし、懇親会で、この『応用心理学のクロスロード』の編集長であられるとの田中真介さんにツカまり説得されて、「大会に参加して思ったこと」をば寄稿するハメに…（笑）。

さて、今次大会での“新しい”試みに、「教育発表」というのがありましたね。大会委員長の外島　裕さんの『開催のご挨拶』に「本大会では学会活性化につながる新たな企画として、本学商学部の学部ゼミナール学生の日頃の学修の成果を発表する「教育発表」を予定いたしました。４年生のみならず３年生、２年生も参加いたします」とありましたように、大会主催校となられた日本大学商学部の各ゼミナールに所属されている学生諸君が「ポスター発表」セッションに参画されての、自主的な発表です。

日本大学では、2019年度より、「日大生がやってみたいを実現するプロジェクト—自主創造プロ

喪失の悲しみを越えて
—マイクロカウンセリングからのアプローチ—

荻野　七重
（白梅学園大学）

この３月に日本マイクロカウンセリング学会の研究集会が開催されました。そこでは「人間性の回復—喪失の悲しみを越えて—」を統一テーマとし、*Life after Loss－Getting over Grief, Getting on with Life*－の著者であるメルボルン大学名誉博士　Dr.Francis Macnab氏による基調講演とパネルディスカッションが持たれました。

今回の日本応用心理学会第86回大会の自主企画ワークショップは、この講演とパネルディスカッションの延長線上にあるものでした。先のパネルディスカッションでは、近年日本を襲ったいくつもの自然災害の被災者の事例、現場に入って直接支援に当たられた人の体験、取材を通して得られた被災者や支援者の事例、法曹界とういう意外とも思われる立場からの支援の事例など、多くの事例を通して、マイクロカウンセリングは何をすることができたのか、また何をすることができるのかということについて熱心な討議が行われました。

「喪失の悲しみを越えて」というテーマを共有するこの度のワークショップは、「マイクロカウンセリングからのアプローチ」とその視点をより明確にし、マイクロカウンセリングの技法は被災者が悲しみを乗り越え日常を取り戻していくことにどのように役立つことができるのか、どのように関わればよいのかを、研究者の立場から再検討し、理論的にも深めていくことを目的として企画しました。

ワークショップは、藤田主一氏に司会を、日本マイクロカウンセリング学会の会長である福原眞知子氏、会長とともにマイクロカウンセリング技法への深い理解によって研修会をリードして来られた玉瀬耕治氏、機関誌『マイクロカウンセリング研究』の編集委員長である山本孝子氏に話題提供をお願いし、マイクロカウンセリングとはいかなるものか、何ができるのか、何が求められているのかをお話しいただきました。

指定討論者としては日本大学教授の横田正夫氏にお願いしました。横田先生からは、精神科の病院で関わられ認知障害のある統合失調症患者のご研究やご体験、大変ユニークなアニメーションのご研究の知見をもとに、意義深い問題提起をしていただくことができました。

質疑討論において、指定討論者のご発言にもフロアからのご発言にも共通して挙げられた話題がありました。それは、社会との関わりの薄い障害を持つ人たちにたいし、また、社会の変化に伴う若い世代の心理的変化、たとえば社会と乖離していることに問題や痛痒を感じない若者が増えていること、こうした傾向にある若者に対し、マイクロカウンセリング技法はどのように、どこまで対応することができるのか、という疑問でした。

今回のワークショップは、マイクロカウンセリングに対して、さらに未来を見据えた視点が求められていることを知る機会ともなりました。

荻野　七重（おぎの・ななえ）／ 1971年、早稲田大学大学院文学研究科心理学専攻博士課程単位取得退学。白梅学園（短期）大学に就任。心理学科・発達臨床学科において学習心理学、認知心理学を担当。2010年３月退職。白梅学園大学名誉教授。日本応用心理学会名誉会員。日本マイクロカウンセリング学会理事（2017年）、ほか組織風土に関する研究など。

BOOK REVIEW おすすめの1冊

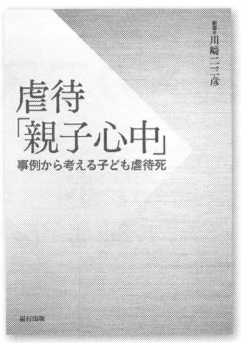
Recommended

広報委員
佐々木 美智子

①虐待「親子心中」事例から考える子ども虐待死

川崎 二三彦 編著

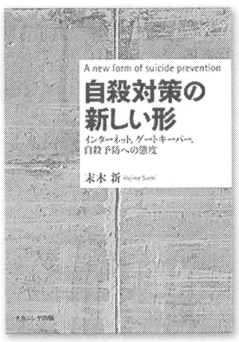
2018年12月5日発行／福村出版／6,000円（税別）



②自殺対策の新しい形 インターネット、ゲートキーパー、自殺予防への態度

末木 新 著

2019年1月31日発行／ナカニシヤ出版／6,500円（税別）



第86回大会の会場で購入した本を紹介する。福村出版は、本学会の賛助会員でもある。

①は、「子どもの虹情報研修センター」の4年間の「『親子心中』に関する研究」をまとめ、巻末には2000年以降の国内外の「親子心中」事例一覧を掲載してある。「親子」でも父母別に分けて分析し、事例研究では家族全体のジェノグラムも図示しながら、子どもたちの生前の姿、関わった行政機関の動き、鑑定結果、公判記録（傍聴も）等が書かれ、事例ごとの専門家集団討議も記録されている。「心中」という呼称が、子どもたちにとっては決して本意ではなく、いまだ適切な言葉が社会的に認知されていない現状も浮き彫りになる。

②は、著者が大学院生で自殺研究を始めた2000年代後半以降、インターネットの世帯普及率の急激な上昇によって、「死にたい」気持ちを匿名の他者に向けて吐露する人々が無数に存在する状況を背景に進めてきた実践的・研究的変遷を紹介し、新しい自殺対策を考え、安定的に実施してもらうためのヒントを示した新世代の書である。オンライン・ゲートキーパー「夜回り2.0」の実践と事例の紹介では、年齢と性別（性別違和含む）も示され、著者の妻の存在と子育ての苦労も垣間見える。

佐々木 美智子（ささき・みちこ）／志學館大学非常勤講師・龍桜高等学校看護学科専門課程非常勤講師。フリーの発達相談員。妊娠期・乳幼児期・学齢期・青年成人期・高齢期・終末期と様々なライフステージの相談活動に従事。恩師（故田中昌人氏）には「学問が生活の顔をつけて歩いている」「もっと学問をしてください」と言われた。「学」が何たるやを問い続けて40数年。

Recommended

東京富士大学
浮谷 秀一

Progress & Application パーソナリティ心理学

小塩 真司 著

2014年7月25日発行／サイエンス社／2,200円(税別)

安藤清志氏と市川伸一氏の監修によるProgress & Applicationシリーズの第8巻として出版された書籍であり、10章で構成されている。第1章　パーソナリティをどう考えるか　第2章　分けること　第3章　パーソナリティ用語の探求　第4

1 国際交流委員会

国際交流委員会 委員長 **角山　剛**

今期は担当常任理事の角山を委員長として、相羽美幸（東洋学園大学）、高橋尚也（立正大学）、竹橋洋毅（奈良女子大学）の３名の先生に委員を委嘱し活動中です。

今期の大きな仕事は、「応用心理学研究」誌英文特集号の編集と刊行です。英文特集号は、４年に１度開催される国際応用心理学会に合わせて、直近の大会で発表された会員を対象に原稿（原著論文と資料論文のみ）を募ります。今回は2018年にモントリオールで開催された第29回大会での発表者が対象になります。すでに投稿は締め切られ、現在は当委員会で審査作業に入っています。次回は2022年に北京で開催される予定ですので、発表をお考えの会員の皆さまには次回英文特集号への投稿もよろしくお願いいたします。

この他に、国際交流に関する事業も当委員会の活動の範疇です。新委員会としての活動はこの４月からで、上記英文特集号の編集作業が始まったところでもあり、国際交流関連の事業計画はまだ具体的には定まっていませんが、学会活動のさらなる活性化を目ざして積極的な取り組みも視野に入れていきたいと思います。予算の関係もあり、どれくらいの活動が可能であるか難しい面もありますが、会員の皆さまには何かよいアイデアや情報などお持ちでしたら、当委員会までお寄せ下さい。

今期もご支援をよろしくお願いいたします。

2 齊藤勇記念出版賞のご案内

外島　裕　齊藤勇記念出版賞選考委員会 委員長

齊藤勇記念出版賞へのご推薦をお願いします。本学会名誉会員の齊藤勇先生の趣旨および基金により平成27年４月１日より施行されている出版賞です。本学会の会員により、応用心理学や心理学のテーマを、心理学を専門としない一般の方々にもわかりやすく書かれた書籍とその著者を表彰することを目的としています。

話題性のあるソフトな内容の書籍に光を当てようとする趣旨により、例えば「新書」、「文庫」、「叢書」、「啓蒙書」等を対象としています。重厚な専門書、翻訳書、あるいは教科書などは想定されていません。出版賞の対象書籍は、本学会員による推薦（他薦・自薦）により、選考委員会で検討され、常任理事会にて決定されます。出版された当該年度（４月１日～翌年３月31日）の書籍について、原則単著、当該年度内に１冊としています。出版された次の年度の年次大会総会において、賞が授与されます。副賞として、基金より３万円贈られます。

応用心理学等を広くまた興味深く多くの一般の方々に理解していただき、人間理解や社会貢献に資するために、会員皆様のご著書の執筆とともに、ご推薦をお願いいたします。今後とも、運営につきましては、齊藤勇先生とご相談を申し上げながら、進めてまいりたいと存じます。

10代・20代前半の青少年少女とすべての子どもの命を守る取り組み

理事長：佐藤　初美
（特定非営利活動法人　10代・20代の妊娠SOS新宿　― キッズ＆ファミリー）

新宿区では、歌舞伎町をはじめ、繁華街で働く10代や20代の女性には、レイプされ、また、望まない妊娠や予期しない妊娠をしても、だれにも相談できない人が多くいます。初診料や受診料を払うお金が無くて病院に行けず、飛込み出産になることも多く、さらに、このような状況に陥った若年女性の自殺も少なくありません。

私は、新宿区立子ども総合センターで、相談員として乳幼児から18歳までの児童の虐待対応と家庭相談支援を行う中で、このような厳しい現状に直面してきました。

誰にも相談できないでいる中高生や20代前半の青少年少女が、相談したい時間、相談できる時間は家族が寝静まった深夜であり、行政支援が終了する18歳からこそ見守り継続支援が必要です。中高生や20代前半の青少年少女たちの実態に即した、行政では対応しきれない24時間年中無休の相談窓口の必要を痛感し、NPO法人「10代・20代の妊娠SOS新宿－キッズ＆ファミリー」を2016年４月に設立し現在に至っています。

この中高生や青少年少女たちは、出産後も、サポートを受けられることを知らずに追いつめられています。その結果、幼いわが子を虐待し、生後０日や０か月で虐待死させてしまう事例があとを絶ちません。昨年も、歌舞伎町のネットカフェ暮らしをしていた20代前半の女性が、だれにも相談できずネットカフェのシャワールームで出産し、嬰児の口を塞いで死なせ、コインロッカーに遺棄するという事件が発生しました。今年もまた、足立区の17歳が自宅出産し、家族に相談できず、17歳の女友達と嬰児を荒川河川敷に遺棄し逮捕されるという不幸な事件が発生しました。

若者と生まれてきた子どもたちすべての尊い命を守ることを目指して、法人スタッフ全員が無報酬で活動しています。私たちは、出産であっても中絶であっても相談者が選択し出した結論に寄り添います。

相談は、無料で実施しており、沖縄から北海道の全国から、イギリスやイタリアなど海外に留学している学生からも来ています。新規相談700件余りの約半数が12歳から19歳以下の中高生や学生からのものです。私たちの活動は他にもあり、保健センターに同行し母子手帳の取得を支援すること、警察や生活保護等の行政の窓口に同行してつなげること、病院の受診に同行し受診費用が無い場合は法人が支払うことなども行っています。また、2019年８月より、住まいが無く妊娠している若年妊産婦や、DV被害から逃げ出して来た10代や20代前半の若い妊産婦が、行政の支援につながるまでの安心と安全を守る仮住まい『シェルター雨宿り』を開設して、滞在利用及び来所相談を実施しています。相談支援を通して、課題解決には、幼児期から義務教育終了までの命の教育＝性教育＝人権教育の充実と、妊婦健診及び出産費用の無料化の必要性を実感しています。活動の詳細は、ホームページをご覧下さい。

URL:http://10dai20dai-ninshin.com

佐藤　初美（さとう・はつみ）/ 1975年から34年間、新宿区立保育園に勤務。2009年～2015年の６年間、新宿区立子ども総合センターで、虐待対応や、貧困等の養育困難家庭、非行等の子どもと家庭の支援相談員。2016年、NPO法人10代・20代の妊娠SOS新宿-キッズ&ファミリーを設立。精神保健福祉士、社会福祉士。

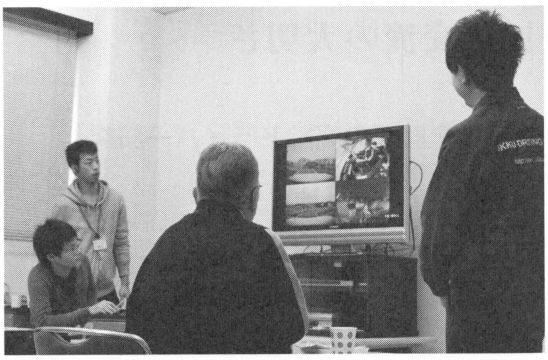


図2　教習所内での運転の振り返り

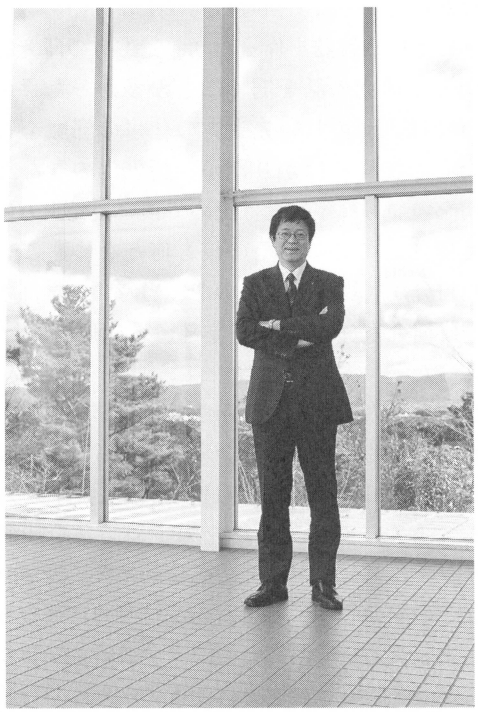
う。筆者自身、交通科学研究会、交通工学研究会、国際交通安全学会などで、他分野の研究者との共同研究に数多く参加してきたが、特に若手・中堅の研究者は他分野の学会にも積極的に参加して欲しい。

● 若い人たちへ ― “現場”重視の研究と国際交流の必要性

交通心理学に限らず、応用心理学の研究では、地域や企業に密着した研究が行われることが多い。成果を生むためには、関係者との調整や調査準備に長い時間を要し、また報われないことも多いので、若手の研究者は、応用心理の研究をためらう傾向にある。その一方で、困難を乗り越えて成果を生み、社会で認められれば、他者の追随を許さない自分独自の研究領域が確立する。ただし、短期的な業績が必要な若手研究者にはその段階まで待つことができない事情がある。そこで、筆者が心がけていることは、自分の研究プロジェクトに若手研究者をお誘いして、共同で研究を実施し、可能であれば、論文も書いてもらうというアプローチである。

交通心理学の研究手法として、実験的手法でなければ駄目というのではなく、むしろ、活用できる手法は何でも活用する必要性が高いと思う。筆者の研究では、実験、質問紙、観察、検査、事例研究などありとあらゆる手法を組み合わせて研究計画を立てて実施してきた。混沌とした我々の現実社会を理解するためには、使える武器は何でも使うべきである。

“現場”にどっぷりと浸かれば浸かるほど、その状況での人間行動のメカニズムが見えてくる。その一方で、そのメカニズムを他者に伝えるための困難が増大する。言い換えれば、専門性が進むほど、周囲の理解者が減ってきて、結果として研究者は孤独になる。ただし、世の中には、本物の研究を理解し、支援してくれる専門家たちも存在している。筆者が国際会議で出会う交通心理学の研究者たちは、一人ひとりの研究者が抱いている孤独感と、それでも“現場”に向き合う研究者への敬意という感覚を共有している。そうした世界中の研究者たちと国際応用心理学会などで出会えば、すぐに旧知の間柄となり、同じ道を歩む研究仲間として、長く続く友情を結ぶことができる。多くの若手研究者に国際会議での積極的な参加と研究者たちとの交流を願う次第である。



蓮花　一己（れんげ・かずみ）／ 京都府出身。帝塚山大学教授。2017年４月より帝塚山大学学長。交通心理学を専門として、ドライバー行動や事故多発地点の分析、交通参加者（子ども、高齢ドライバー）への教育手法の開発等の研究を実施。ドイツやフィンランドに留学・在外研修。内閣府第10次交通安全基本計画専門委員。放送大学客員教授（『交通心理学』担当）。

行われていません。そこで、心理学、中でも社会における集団や個人を研究対象とする社会心理学の観点から新しいアプローチを試みることにしました。妖怪が生まれるまでの心的過程や以前果たしていた役割、その役割を喪失したことによる弊害や効果、そして現代における妖怪の代替物となり得るものなどを明らかにすべく、研究を進めています。

この研究の最終的な目標は、妖怪を通して、現代社会のさまざまな問題に対する解決の手がかりを探ることです。この社会心理学的研究が、よりよい社会生活を送るための手がかりになれば、大変うれしく思います。

最後になりますが、研究を進めるにあたり、たくさんの方々にお世話になりました。指導教授である桐生正幸先生を始めとする先生方、同じ研究科の仲間たちなど、私に関わり、支えてくださった全ての方々に、この場をお借りして御礼申し上げます。そして、いつも暖かく見守り、協力してくれる家族と友人、妖怪たちに感謝いたします。ありがとうございました。

高橋　綾子（たかはし・あやこ）／東洋大学大学院 社会学研究科 社会心理学専攻　2003年 横浜国立大学教育人間科学部を卒業後、一般企業勤務を経て、2017年４月東洋大学大学院社会学研究科社会心理学専攻博士前期課程に入学、2019年３月修了。現在、同大学院博士後期課程に在学中。

大学探訪

▶帝京科学大学◀

どの子も輝ける学習展開の構築に向けて

石橋　裕子

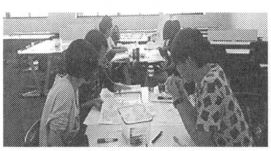
当研究室は、様々な教育的なニーズをもつ幼児児童生徒を対象とした「特別支援教育」を多角的な視点で研究する場です。支援対象児は発達障害児の他、情緒障害、知的障害等の様々な障害のほか、アレルギー、不登校（園）、外国籍、貧困、虐待を受けている幼児児童生徒（以下、被虐待児）など、多様な問題を抱えている子どもすべてです。なかでも研究が急務なのは、被虐待児への学校での学習支援です。被虐待児は自身の身を守ることに精一杯で自宅で学習する環境にはないため、学ぶ習慣が身に付いていない様子を多く目にします。その上、脳科学の研究では、虐待を受けたことによって、脳が発達障害児と同じような構造に変化することが明らかになってきています。現在、児童相談所（以下、児相）や入所施設での被虐待児に対する学習支援については研究されていますが、学校での学習支援に関する研究は進んでいません。

児童福祉法（以下、法）第25条および児童虐待防止法（以下、防止法）第６条では、虐待を受けたと思われる子どもを発見した全ての国民に通告する義務がある、と定めています。通告後は法第33条，防止法第８条に基づき児相に一時保護されることがあります。その後は、児童養護施設等の児童福祉施設への措置入所や家庭に戻されての経過観察になります。2018年度の児相の虐待対応件数は15万9,850件（速報値）で過去最高値です。2017年度は、約12万2,000の対応件数に対して一時保護された子どもは約２万件、そのうち施設入所は約4,800件、残りは家庭に戻されています。つまり、学級には、通告・一時保護されても「元通り」の生活に戻った被虐待児が多く存在しているのです。

2020年度から実施される新学習指導要領では、これまで中心的だった教師が話して教授する授業形式から、学ぶ側が主役となる「主体的･対話的で深い学び」（アクティブラーニング）への転換が求められています。グループ活動による様々な学習が研究されていますが、コミュニケーションの取り方が困難な発達障害等の学習困難児はグループ活動がしにくい等の理由から、個別での学習支援が中心です。そこで当研究室では、支援対象児を含め、誰もが輝ける授業を展開するために有効な「協同学習」を実践研究しています。協同学習は、共に課題に取り組むことにより、仲間を高める責任と、仲間からの支援に誠実に応えるという２つの「個人の責任」がある、小グループを活用した指導法です。

被虐待児等を含めた特別支援教育での取り組みや今後の展望を、2019年３月にミネルヴァ書房から上梓した「よくわかる！ 教職エクササイズ⑤ 特別支援教育」（石橋裕子・林幸範編著）にまとめましたので、是非ご一読ください。

「通告して終わり」ではなく、そこからが様々な支援への第一歩です。今後も、被虐待児への学校での学習支援に関する情報を発信していきます。



▲学生の「協同学習」での学び

▲学生が児童のグループでの学びをサポート

石橋　裕子（いしばし・ゆうこ）／ 修士（学術）　鎌倉女子大学中高等部教諭・鎌倉女子大学短期大学部専任講師・東京福祉大学短期大学部准教授を経て、現在帝京科学大学教育人間科学部教授。応用心理士。専門は特別支援教育、協同学習、初等音楽教育。

第86回大会開催を振り返って

大会事務局長：時田　学（日本大学商学部）
大会副事務局長：山本　真菜（日本大学商学部）

第86回大会にご参加いただいた皆さま、誠にありがとうございました。大会事務局の至らぬ点が多々あったかと思いますが、無事に大会を終えることができたのは皆さまのお陰です。本当にありがとうございます。改めまして感謝申し上げます。

大会の準備を始めるにあたり、前回（第85回大会）開催校である大阪大学の臼井伸之介先生、中井宏先生、森泉慎吾先生には、引継ぎ事項やその他のデータも頂きました。ご多用にもかかわらず、ご丁寧にご対応いただき厚く御礼申し上げます。まず何から手を付けてよいか分からないなか、作業の指針となりました。また、大会当日のスタッフマニュアル作りにおいては、過去の日本体育大学での開催時のスタッフマニュアルを大会長の藤田主一先生より頂くことが出来たり、本学の中川充先生からご経験を生かしたスタッフマニュアルについてご教示を頂いたりすることも出来、本大会用のマニュアルの作成に至りました。

事務局である株式会社国際ビジネス研究センター様には、大会準備から大会当日までに至る多くの場面で助けていただきました。また、理事長の藤田主一先生、事務局長の市川優一郎先生、大会webサイト作成や申込システム作成をご担当いただいた軽部幸浩先生にはたくさんのお問い合わせをさせていただきました。先生方のお心遣いにいつも励まされていました。

大会の前日準備と当日２日は、大会委員の先生方と、本学の学部生スタッフにも協力してもらいました。特に、本学の武田圭太先生、深見将志先生には大変ご尽力いただきました。学生スタッフは、受付、案内、会場など、大会の顔となるところで活躍してくれて、私たちの準備不足や不手際をカバーしてくれるほどでした。また、自分たちでより良い方法を考えて対応している点もとても頼もしく感じられました。また、本大会では、初めて学部学生による共同研究のポスター発表を行いました。学生によっては、スタッフとして働きながら発表も行うというタイトなスケジュールをこなしてくれました。また大会委員の先生方にはお忙しい中、座長などでご協力いただきましたこと、重ねまして感謝申し上げます。

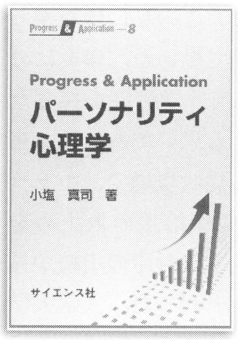
大会のプログラムと論文集の表紙は、日本大学商学部の構内の写真が使用されておりますが、これは、祖師谷で起業されているアトリエ・フルール株式会社様に作成していただいたものです。他にも、大会２日目のお昼にはウルトラマン商店街のお店特製のお弁当を販売してみました。このように、今大会では、ウルトラマン商店街・在住の方々にもご協力をいただきました。

大会の準備から大会終了までを振り返ると、多くの方々にお力添えいただいたことを深く感じ入ります。

最後に、このような貴重なお役目をいただけましたこと、厚く御礼申し上げます。

時田　学（ときた・がく）／1963年 千葉県生まれ。日本大学院文学研究科心理学専攻博士後期課程修了。博士（心理学）。専門は生理心理学であったが、現職を得てからコミュニケーション・リーダーシップ・ロール・プレイングなどの研究を行う。日本大学文理学部心理学科助手を経て現在日本大学商学部准教授。本学会は長らく不良会員として在籍していたが、本大会を機に改心を決意し、手始めに学会発表を行う。

山本　真菜（やまもと・まな）／1986年 大阪府生まれ。日本大学大学院文学研究科心理学専攻博士後期課程修了。博士（心理学）。専門は社会心理学。大妻女子大学社会・臨床心理学専攻助手を経て2019年４月より日本大学商学部専任講師。2018年より日本応用心理学会員。本学会では実は発表経験なし。今度は発表者として大会参加を目指す。



章　パーソナリティ特性の探究　第５章　５つのパーソナリティ特性　第６章　ビッグ・ファイブの評価とその他の見方　第７章　測定上の注意　第８章　さまざまな検査　第９章　さまざまなパーソナリティ特性　第10章　パーソナリティの様相 である。この書籍は、パーソナリティを理解するための独特な構成や記述が特徴である。特にパーソナリティ特性については、言葉や用語の探求からはじめ、パーソナリティ特性の探求、そのパーソナリティ特性を絞り込んだビック・ファイブ、ポジティブとネガティブな意味をもつ特性といったように詳細に解説されている。また、パーソナリティの測定についても、測定の基礎である信頼性や妥当性を踏まえた各種の検査をわかりやすく紹介している。それ以外にパーソナリティについてのこだわった記述もあり、パーソナリティを理解したいと思う読者の要望を満たしてくれる書籍である。

浮谷　秀一（うきや・しゅういち）／ 1953年千葉県市川市生まれ。東京富士大学特任教授。日本応用心理学会理事、日本パーソナリティ心理学会理事。現在興味のある主なことは、「地域性」「血液型性格判断」「EQ（Emotional Quotient）」。日本応用心理学会企画 シリーズ『現代社会と応用心理学』（福村出版）第５巻「クローズアップ メディア」第１巻「クローズアップ 学校」に編著者として関わった。他に、シリーズ『心理学と仕事』（北大路出版）第９巻「知能・性格心理学」編著がある。

Recommended

和光大学
いとう たけひこ

アスペルガー医師とナチス
～発達障害一つの起源
エディス・シェファー 著
山田 美明 訳

2019年６月19日発行／光文社／1,900円（税別）

本著の表紙には、「自閉症スペクトラムの概念を拡大したハンス・アスペルガー医師の裏の顔を、史料の掘り起こしで白日の下に！待望の邦訳」とある。発達障害に関心のある人にピッタリの本と言える。ナチス党には入党しなかったとはいえ、極右思想の持ち主であるアスペルガー医師は、その優生学思想に共鳴した。生産性が低い人、共同体への適応ができない人は社会には不要であるとの考え方である。ナチ時代のウィーンの支配的な考えだが、これは現代日本の保守政治家にも共通する思想である。彼は治療不能と判断された障害児を死亡させるための施設に移す当時の児童精神科医としては当たり前の仕事をした。しかし実際に「安楽死」に直接手を下していたわけではないようで、極右思想の持ち主ではあったが、ナチス党員ではなかったためか戦後の学界から追放にはならなかった。一方で、特異な才能を持つアスペルガー型の自閉症児をナチスの優生政策から救済したとの評判も持つこの主人公に対して、英語のウィキペディアでは詳しく紹介されているが、日本版には彼の紹介の項目はない。

いとう・たけひこ／ 1955年 四日市市生まれ。和光大学教員。日本応用心理学会会員。心理科学研究会平和心理学メンバー。日本心理学会批判心理学研究会会員。平和のための心理学者懇談会世話人。主な編著書として、『現代社会と応用心理学５：クローズアップ「メディア」』「トピック23　報道のゆくえ：311原発報道は視聴者をどこへ導くのか？一報道されていること、されていないこと」(pp.225-233. を担当）福村出版 『平和を創る心理学（第2版）』（ナカニシヤ出版）、『大学生活をゆたかにする心理学』（福村出版）など。論文は https://www.itotakehiko.com/papers/ を参照。学会発表は https://www.itotakehiko.com/conferences-1/ を参照。

10 学会活性・研究支援委員会より

古屋　健

日本応用心理学会では、毎年10月末日締め切りで若手会員研究奨励賞の募集をしています。対象は30歳以下の院生会員の方です。大学や研究所にお勤めの先生方は、組織から提供される研究費の他にも科学研究費補助金をはじめとする外部資金を調達するいろいろな道が開かれています。しかし、院生会員の方は修士論文や学位論文のための実験や調査を行うための研究費の調達には、何かと苦労されていることと思います。この賞は、若手会員から申請のあった研究計画に対し、研究資金10万円を提供するものです。使途は自由で領収書等の提出も不要、2年以内に成果を大会で発表して頂くことが条件です。これまでの受賞倍率は約4.5倍でした。一度落選しても、書き直して何度でもチャレンジできます。院生会員の方には、年中行事として「10月は奨励賞の応募書類を作成する月」と思っていただければ幸いです。詳しくはHPをご覧ください。

日本応用心理学会では、その外にも院生会員が大会で発表しやすいよう大会発表費を0円にしています。院生会員の年会費と大会参加費だけで研究発表できる、これほど院生に優しい学会は他にはありません（と思います）。お近くに大学院生がいたら、ぜひとも入会をお勧めください。よろしくお願いいたします。

11 倫理委員会

古屋　健

会員の皆様のご協力により、学会の中で研究倫理が問題となって取り上げられるような事案は今のところ起こっておりません。今後とも、研究の実施や公開にあたっては、十分な倫理的配慮をお願いいたします。

常任理事会で機関誌編集方針が話題になった折、藤田理事長より、所属する機関に倫理審査委員会がなく、倫理審査を受けられない会員のために何かできることはないだろうとかという問題提起がなされました。投稿論文の審査において研究倫理への配慮は不可欠で、倫理審査を受けていない論文をどのように審査するべきか、一定の基準を決めておく必要もあります。そこで、令和元年8月に開かれた編集委員会において、機関誌投稿・執筆規定を改正するためのWGの立ち上げが決まりましたが、そのWGの中に倫理委員会の委員（古屋）も加わって研究倫理の問題についても議論することになりました。問題を一挙に解決できるような名案はありませんが、来年の総会までには一定の結論が出せるよう議論していく予定です。

アラバマでの恩師との出会い

大工　泰裕
（大阪大学大学院）

日本学術振興会若手研究者海外挑戦プログラムの支援を受け、2019年９月から２月にかけて、米国アラバマ州にあるアラバマ大学バーミンガム校に留学をしてきました。おそらく、アラバマ州と言ってすぐに分かる日本人はほとんどいないでしょう。地理的にはアトランタから西にバスで３時間ほど、「ディープサウス」とも呼ばれるアメリカ南部にあります。歴史的にはキング牧師の公民権運動が有名でしょうか。有名な観光地もないので旅行客も少なく、大学にも日本人はほとんどいません。私が滞在中に知り合った日本人も両手で数えられるほどでした。

そんな土地で私のホストになってくださったのは嘘研究の世界的権威でもあるTimothy R. Levine教授でした。Tim（私はいつもこう呼んでいます）との関係は、彼の新しい理論に関する論文を偶然私が読んで感銘を受け、メールで問い合わせたのが始まりでした。その後、未発刊論文のドラフトを送ってもらうなど連絡を取り合う中で、軽い気持ちで行ってもいいかと聞いたところ、「Yes」とだけ返事が来たので行くことにしたというのが留学のきっかけでした。

そんな軽い気持ちで始まった留学でしたが、滞在先での生活は非常に充実したものでした。Timとは研究の興味関心が非常に一致していたため、私が質問するとすぐに関連文献を教えてくれました。自分の分野の権威がすぐ隣で質問に答えてくれるという環境は、研究を遂行する上でこの上なく恵まれた環境でした。また、幸か不幸か、Timの研究室には博士後期課程の学生が一人もおらず、マンツーマンで面倒を見てもらうことができました。

Timはホスピタリティにも溢れた人物で、私の研究を見るだけでなく、彼が関わっていた共同研究のプロジェクトに混ぜてくれたりもしました。学科長でありながらも毎年数本の論文を量産し続けるトッププレーヤーと、共同研究者として対等に議論を行うのは、知的興奮を伴う有意義な経験でした。帰国後も、共同研究のプロジェクトは続いており、現在、共著での論文を執筆している段階です。

「行ってみるか」くらいの気持ちでスタートした異国の地への留学ですが、蓋を開けてみれば、海外ネットワークと専門分野の知識という大きな収穫のある滞在でした。私と同じような境遇にあり、留学を迷っている大学院生の方々は、深く考えずにとりあえず飛び出してみるというのも手かもしれません。

大工　泰裕（だいく・やすひろ）／ 2015年 大阪大学人間科学部卒業、2017年 大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程修了、現在、同研究科博士後期課程在学中。専門は社会心理学で、嘘・詐欺・体罰などをテーマに研究を行っている。

広報委員会

川地 亜弥子
張　貞京
来田 宣幸
佐々木 美智子
田中 真介

表紙写真：「カンムリワシの飛翔」
2020年１月、西表島にて
（撮影：本原琴美）

応用心理学のクロスロード Vol.12

編集・発行　日本応用心理学会
〒162-0041
東京都新宿区早稲田鶴巻町518
司ビル3F
(株) 国際ビジネス研究センター内
TEL.03-5273-0473
FAX.03-3203-5964
E-mail j-aap@ibi-japan.co.jp
HP https://j-aap.jp/

編集制作・協力　本原琴美
デザイン　株式会社 杏林舎
印刷・製本　株式会社 杏林舎

2020年３月31日 発行

編集後記

■ ご寄稿頂いた皆様に深謝申し上げます。今号の編集委員会は、メールにスカイプを駆使して、打ち合わせ・取材・編集と進めてきました。現代のテクノロジを使いこなす技術と、一緒にいいものをつくろうという熱意のコンビネーション。新型コロナウイルス感染発見拡大で、みなさまもメールとオンライン会議が増えているのでは…でも、直接会えると安心しますね。私は名ばかり編集長で、支えて頂いた編集委員の皆さんに感謝の一言です。
（川地亜弥子）

■ 編集後記を書いている３月は、様々な終わりと始まりの準備があります。しかし、今年の３月は、これまでに経験したことのない感染症の猛威に振り回される日々を送っています。新しい年度を無事に迎え、活力のある日々がいつ戻ってくるか分かりませんが、困難に直面した時こそ、何を大切にするべきか改めて考えたいと思います。2020年度の学会で、様々な活力ある研究に出会うことを楽しみにしております。（張　貞京）

■ 日本大学で開催された日本応用心理学会の第86回大会、私には２つのミッションがありました。１つは広報委員としてのクロスロードの取材。もう１つは次回大会に向けての情報収集と案内などです。最初のうちは企画や発表などの取材ができていましたが、途中から次年度のことで頭がいっぱいになり、クロスロードの取材・編集については十分な働きができなかったかもしれません…。他の委員の先生方の力に頼りっぱなしでした。ありがとうございます。第87回大会（京都工芸繊維大学）の準備も進みつつあります。大会委員長と広報委員を兼務しますので、この相加・相乗効果が生まれるよう、広報委員としての任期の最終年を全力で駆け抜けます。（来田宣幸）

■ 温泉の湧き出る地底には、豊かな水とマグマがあります。今回の編集では、応心の地表と地底を形作る、新旧の世代とジェンダーの平等性・連携を表現できたらと構想しました。編集委員の構成と働きそのものも含めて。地表の道には、新装なった大通りもあれば、昔ながらの懐かしい裏通りもあります。それぞれが、人通りのある限り、にぎやかな、あるいは静かで心にしみる語らいの場でありますように。（佐々木 美智子）

■ 人類は歴史上初めての感染症を経験しています。日本は武漢への支援物資に「山川異域　風月同天」の漢詩（国異なれど風月の営みは同じ一つの空の下）を添えました。大連から日本に届いたマスク20万枚の箱には「春雨や身をすり寄せて一つ傘」。ウイルスはときに自分の存在を賭けて人と人とのつながりの温かさを教えます。人間にとって病いとは、現状の変化を願い助けを求めて発信されるメッセージ。そして回復とは、病気が治って単にもとの自分に戻ることではなく、病いに出会い心身の不調とともに過ごす中で、多くの人に支えられながらすべてを受けとめて今の自分を作り上げていくその豊かな道行きのこと。回復する力と可能性をもった人だけがその病気になることができる、と言ってもよいでしょう。
（田中真介）

日本応用心理学会
第86回大会報告
日本大学商学部

「応用心理士」のご案内

川本　利恵子
（「応用心理士」認定審査委員会 委員長）

日本応用心理学会では、学会員で業績のあるものに対し、本人の申請により一定の手続を経て、「応用心理士」の資格認定証を交付しています。

資格認定は、厳重な試験に合格しなければ一定の資格を取得できないものもありますし、心理学に関する所定の単位を取得すれば一定の資格を認定するところもあり、まさにさまざまです。本学会では認定の基準を一歩進めて、学会の会員（名誉会員・一般会員・院生会員）であること、きちんとした業績を持っていることを主要な要件にしています。この資格は、個人や集団の心理学的指導に努力している人びとの社会的地位を承認するための一助として考えられています。

「応用心理士」は資格であって免許ではありませんが、これを所持することによって職場における活動は現在よりもさらに拡大され、多くの人びとの承認を受けると思っています。もちろんこの「応用心理士」の資格を取得したからといってなんでもできるわけではありません。人事・労務関係、医療・看護関係、司法矯正関係、交通関係、教育関係、相談関係などの仕事に従事している人が、心理学的な仕事の重要性をわきまえ、十分留意して活動することが必要であると考えています。

「応用心理士」の資格要件をご参照の上、認定審査の申請をされますことをお待ちいたしております。

「応用心理学のクロスロード」11号の記事に関する訂正とお詫び

前号（11号）「CROSSROAD ESSAY」に一部誤植がありました。訂正してお詫びいたします（3ページ右欄、22～23行目）。

【誤】「メイドさんが中国では5名、運転手を2名擁する、日本では考えられない…」

【正】「メイドさんが5名、運転手を2名擁する、日本では考えられない…」
（＊「中国では」を削除）

した。「20代で学会誌に投稿し、30代でも投稿を続けていると、当該専門領域の第一線に参入できる。ところが、40代になり教授となると急に研究を続けなくなり、大学院生や若手との連名発表だけに終始する研究者が少なくない。40代になっても27歳でもできる仕事を継続していると、体力が落ちていないことの証明にはなる。40代からが研究者としてのサバイバル。さすがは40代、50代、60代と、専門家に賞賛される質や独創性を目指すべきではないか。そうしないのは、これまで努力してきただけに、大きな損失ではないか、と訴えた。USAでは、チュニア（定年までの終身雇用）を獲得できない准教授で、庭に落ちた葉っぱを掃除機で吹き飛ばすガーディナー（庭師）となっている人もいる。

最後に、現代の若き研究者に、杞憂ともいえるエールを送りたい。チャンスはいつ来るかわからない。そのときに備え、成果を蓄積してほしい。現場の実務経験が評価されることもありえる。どんなに挫けても、愚痴っても、泣いても構わない。今すぐの見返りや報酬がなくても、高みを目指して着実に研究を続けること。20数年前だが、カリフォルニア大学サンディエゴ校の公募を見た。任期付きの准教授で、100倍を超える倍率であった。宝くじに当たるような確率への応募も、続けないと可能性はない。努力を続けても、成果を蓄積してきても職を得られないことがある。それでも努力してきた誇りと、研究成果に対する矜持だけは確実に「あなた」のものとなる。

合　掌

内藤　哲雄（ないとう・てつお）／博士（人間科学）、明治学院大学国際平和研究所研究員、信州大学名誉教授、日本応用心理学会名誉会員、PAC分析学会会長。2018年 福島学院大学を退職後、福島県伊達市霊山町掛田に移住。自宅でPAC分析の研修なども実施している。

「鹿児島県令和元年度母子保健事業功労者知事表彰」にあたって

佐々木 美智子
（志學館大学非常勤講師）

この度、鹿児島県姶良市の母子保健事業チームの推薦により、表記の表彰を受けました。発達相談という仕事は、単独ではできませんので、四半世紀のワンチームの取り組みが評価されたものと受け止めています。

振り返りますと、「保健所法」が「地域保健法」に変わり、県の保健所で行ってきた母子保健事業が市町村に移り、県内各地での研修会や自主的学習会に招かれ、その後地元の保健所管内各自治体で1歳6か月健診や3歳児健診等に従事した前史があります。「平成の大合併」で市町村は分かれて合併し、姶良・蒲生・加治木3町（現姶良市）の発達相談事業が残りました。

平成7年度から30年度にかけての23年間で、旧3町（現姶良市）で対面・対話した親子さんは、個別と集団合わせて千例近くになります。子育て支援事業や療育事業と協力しつつ健やかに育っていかれた方々が大半を占める一方で、家族で頑張った末に一家心中という悲しい事例も体験しました。親子さんたちに寄り添い、行政施策を充実させてきた道のりでした。姶良市が、県内でも子どもの数が減らない市として今あることは、子育て最前線にいる親子さんと母子保健事業チームの努力の賜でしょう。課題は常に目の前にありますが、日々生まれ、育っていく命を、これからも見守り続けたいと願っています。

▶滋賀短期大学◀

「被虐待児童生徒の学習支援」の構築に向けて

林　幸範

当研究室は短期大学の研究室ですので、卒論指導の生徒はいませんが、現在「特別支援教育」における「被虐待児童生徒への学習支援」をキーワードに多角的に研究を実施しています。

大学院以降、「学習意欲」「中学生の適応学級における学習治療」「中学生のストレス」「子育て支援施策」「特別支援教育」「大学における共同学習」などの研究に従事してきました。その根底にあったのが、「どうして勉強ができないのか」というテーマです。このテーマの重要性を教えてくれたのが、亡き恩師の河井芳文先生（学習ドッグの創設者）や中学校の勉強が苦手な子ども達でした。それ以来、このテーマにかかわり続け、現在に到っており、その延長線上で大学での授業改善も実施しています。

最後のテーマにと考えているのが、「被虐待児童生徒の学習支援」の構築です。というのも、1990年に南博先生と共著の「家族心理劇場」（フォー・ユー社）で心理学者としては初期に「子どもの虐待」について記述しました。それ以来、講演会・授業など、ことある毎に「子どもの虐待」の問題性について、福祉的側面ばかりではなく教育的側面からも論じてきました。さらに、平成18年度に文科省が作成した子どもの虐待に関する研修の教材でも、被虐待児童生徒は特別支援教育の対象として教育を実施すべきであることを提言しています。しかしながら、その提言から10年以上経っても文部科学省を含め、教育界では全く進展していないのが現状です。さらに、文科省は「家庭教育」の充実を提言していますが、このような子どもたちは、どのようにすればよいのかの提言は一言もありません。しかも、教育現場からは、被虐待児童生徒の学習支援の要望は多くあります。

このような状況から、「被虐待児童生徒の学習支援」についての実践的研究を研究グループで実施し、その構築に尽力しています。しかしながら、公的な基金がなかなか得られないため自費での研究となっており、進展していないのも事実です。私も、次年度で定年退職となりますので、ここ数年でなんとか研究のまとめをと考えていますが、まだ道半ばですが、できるところまでは頑張ろうと思っています。

▲2019年第86回大会にて石橋裕子先生（右）と。

林　幸範（はやし・ゆきのり）／ 修士（教育学、教育心理）
財団法人青少年研究所主任研究員、鎌倉女子大学教授、東京福祉大学短期大学部教授、こども教育宝仙大学教授、池坊短期大学教授を経て、現在滋賀短期大学幼児教育保育学科特任教授。専門は、特別支援教育、協同学習、教育相談・教育心理学。

まして、日本応用心理学会の年会費徴収に「口座振替」を採用することが承認されました。また本件は、8月末の第86回大会（日本大学商学部）における理事会ならびに総会にて、事務局長として私より謹んで報告させていただきました。

年会費徴収に口座振替を採用することにより、会員の皆様には、郵便局に出向かなくてもよい、現在窓口やATMでお支払いいただいている手数料がかからない、未納による投稿資格・発表資格・会員資格の喪失が防げる、などのメリットがございます。また、学会側のメリットとしましては、会費収入の安定化、振込用紙の送付等請求に係るコストの低減、事務作業の軽減が見込まれます。

この口座振替は、早速次年度（2020年度）からの採用を予定しております。このクロスロードが発行される頃は、既に会員の皆様から申請書をご提出いただき、4月以降の初めての口座振替を控えている時期かと思います。現在の会員の皆様には、希望者のみご申請いただいておりますが、未だ口座振替を申請されていない会員の皆様におかれましては、ぜひとも積極的にご検討いただけますよう、心よりお願い申し上げます。

市川 優一郎（いちかわ・ゆういちろう）／ 日本大学大学院文学研究科博士後期課程修了（博士（心理学））。日本大学文理学部心理学科助教を経て、現在日本体育大学体育学部体育学科准教授。専門は、生理心理学、教育心理学、健康心理学。

8 『応用心理学ハンドブック』について

ワーキンググループ・編集委員会 **藤田 主一・古屋 健**

日本応用心理学会では、学会発足から今日まで、学会が企画・編集した書籍を多数出版してきました。学会誌・機関誌を除く代表的な書籍には次のようなものがあります。

- ●日本応用心理学会編『心理学講座』（全12巻、別巻）中山書店、1953～1954年。
- ●日本応用心理学会・日本職業指導協会共編『職業指導講座』（全6巻）中山書店、1955年。
- ●日本応用心理学会産業心理部会編『産業心理ハンドブック』同文館、1958年。
- ●日本応用心理学会編『ロールシャッハ・テストの実際適用例－ロールシャッハ・シンポジウムより』誠信書房、1960年。
- ●日本応用心理学会産業心理部会編『日本産業心理関係文献目録』労働科学研究所、1963年。
- ●日本応用心理学会編『応用心理学事典』丸善、2007年。
- ●日本応用心理学会企画『現代社会と応用心理学』（全7巻）福村出版、2013～2015年。

これらの輝かしい実績を踏まえ、このたび、学会設立90周年記念として、新たに本学会企画『応用心理学ハンドブック』（福村出版）を刊行することになりました。企画のためのワーキンググループ（WG）には藤田主一（理事長、以下敬称略）、古屋健（副理事長）、角山剛（常任理事）、谷口泰富（前副理事長）、深澤伸幸（前機関誌編集委員長）、市川優一郎（事務局長）の6名が参加し、概要を決定しました。2020年の第87回大会（京都工芸繊維大学）でお披露目したいと考え、現在、出版へ向けて編集作業に取りかかっています。

構成はこれまでの類書には例がない斬新なものとなっています。全体は応用心理学の主な領域をカバーする「研究法」「認知」「感情・情動」「教育」「発達」「人格」「臨床」「福祉」「健康」「看護・医療」「犯罪」「社会・文化」「産業」「交通」「災害」「スポーツ」の16章から構成され、各章タイトルは「○○と応用心理学」

世が中心になって始められ、次第に先住民を始めとする他のマイノリティからの支援が集まり、最終的には白人マジョリティの人々も参加する形へと大きく発展していきました。そして遂に1988年9月、リドレス合意（政府からの正式な謝罪、生存者一人当たり21,000ドルの保証、そして日系社会の再建保証基金1200万ドル）に至りました。アメリカでもほぼ同時期に、日系人に対するリドレス合意がなされています。

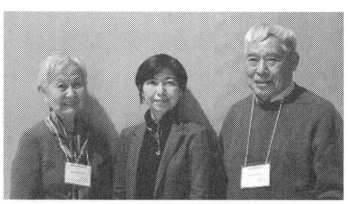
カナダ滞在中、日系2世・3世・4世の方々からお話をうかがいましたが、リドレス運動が日系社会の再構築だけでなく、それぞれの家族にとっても大きな意味をもっていたことが個別の面接の中で理解できました。収容所体験者からは、リドレス合意によって、それまでずっと額の上に乗っていた大きな重しがようやく下ろされ「真のカナダ人になることができた気分だった」とうかがいました。また収容所体験者の子・孫からは、「リドレス合意の後に、親から体験を初めて話してもらった」「親たちに対する感謝の念と誇りを強く感じた」と話してくださいました。今では、日系カナダ人のリドレス運動はカナダにおける他のリドレス運動の成功例となっています。私自身も日系カナダ人の調査を通して、社会運動や社会規範の変化が偏見を大きく低減させていくダイナミックな事例を学ぶことができました。

日系カナダ人の歴史を学ぶ意味

滞在中は日系カナダ人の歴史だけでなく、一般の人々が過去の多様な人種・民族差別を振り返って反省する場面にしばしば出会いました。例えば、BC州の社会科の副読本の中には、WRONGと名うったシリーズがあります。カナダのマイノリティの歴史を学ぶテキストですが、1巻は日系カナダ人、2巻が中国系カナダ、それにインド系カナダ人、先住民、アフリカ系カナダ人の巻が続いています。多文化の保持と社会的平等の規範を授業の中で学び、過去の過ちを繰り返さないための手立てについて話し合えるカナダ社会の姿が、私にはとても羨ましく感じられました。

日本人は国民性を民族的に定義し血統主義を重視する考えが強いと言われていますが、そのことが国内に住む様々な民族的ルーツをもつ人々の存在に対する冷淡さにつながっているようです。もしかすると、国内にいる外国にルーツをもつ日本人よりも、「日系カナダ人」の方を、内集団成員とイメージしやすい人もいるかもしれません。実際には、日系カナダ人の方々のアイデンティティは、当然ながら全くの「カナダ人」であり、日本に親しみを感じている人もいれば、特別な強い思い入れどころか関心すら無い方も大勢いるのですが・・・。ただ、過去に日本からカナダに渡った1世やその子孫の立場は、いま日本に住む外国にルーツをもつ人々の立場と同じです。日系カナダ人が「日本にルーツがある」ことが原因で受けた差別の痛み・怒りを知りそれに共感することは、身の回り（日本国内）で生活している外国にルーツをもつ人々の状況に思いをはせることにつながるでしょう。この点からも、日系カナダ人の差別の歴史やリドレス運動について日本人が学ぶことには大きな意味があると考えます。

最後になりますが、カナダ滞在中は、SFUのDal Young Jin先生を始め、日系カナダ人や日本人移住者を含むたくさんの現地の方々に助けていただきました。ここに深く御礼申し上げます。



▲写真1
Mary and Tosh Kitagawa
夫妻とカンファレンスにて

◀写真2
サイモン・フレイザー大学の
バーナビーキャンパスにて

上瀬　由美子（かみせ・ゆみこ）／ 日本女子大学大学院文学研究科博士課程後期単位取得満期退学。博士（文学）。現在、立正大学心理学部教授。著書に「ステレオタイプの社会心理学」（2002）サイエンス社、など。

催への思いを語られ、お開きとなりました。なお、懇親会では、日本大学管弦楽団の学生諸君50名以上の参加協力をいただいて、開始前からお開きに至るまで演奏を続けてくれました。本当に深く感謝いたします。日本大学管弦楽団は日本大学名誉教授・本学会名誉会員の山岡淳先生が、約60年前に、学生の心の絆のありかたに深く思う所があり創立した管弦楽団ときいています。本大会にご参加の諸先生方の研究の視点、また、本学会員の相互の関係性を感じるにつけ、応用心理学の実践において、人と人との心を結ぶ懸け橋となっていきたいと思います。

なお本大会には、懇親会の席だけではありませんが、16名もの名誉会員の先生方がご参加とのことでした。ご参加を賜りまして誠にありがとうございました。

■大会委員会から

本学会員の皆様、第86回大会はいかがだったでしょうか。皆様の研究への貢献と相互の交流によるさらなるご発展のお役にたつことが出来ていれば幸いです。何度か、企画のご相談をさせていただいた常任理事の先生方、特に、細部にわたりご教示をいただいた、藤田主一理事長、市川優一郎学会事務局長、軽部幸浩常任理事、そして、第85回大会委員長の臼井伸之介先生に深く感謝申し上げます。また、大会の事務局業務を丁寧にご支援いただいた国際ビジネス研究センターの吉廣様皆様に御礼を申し上げます。本大会が参加の皆様のご期待に添えたものであるならば、本大会事務局長の時田学准教授、副事務局長の山本真菜専任講師の熱心な取り組みの成果と存じます。山本真菜先生は、今年度より専任講師として本学商学部に着任いたしました。組織社会化の大変な過程の中で、本大会の実務的準備と実施にエネルギーと時間を注いでくれていました。両先生に敬意を表します。さらに大会委員として、大会当日の運営を差配いただいた事務局幹事の深見将志専任講師、学会研修会など会場の運営にご配慮いただいた武田圭太教授、準備マニュアルの整理をいただいた中川充准教授に感謝申し上げます。時田先生とともに、井上裕珠専任講師による学部ゼミナール学生の「教育発表」の企画のご提起がなければ新たな試みの挑戦はありませんでした。ありがとうございました。堀尾志保非常勤講師、河田美智子非常勤講師には発表論文集編集の確認をいただきました。感謝いたします。また、日本大学各学部の心理学関連の諸先生方のご協力を得ました。大会顧問の文理学部心理学科の横田正夫教授をはじめ、12名の先生方のご支援を頂きました。深謝申し上げます。お名前はプログラム、大会論文集にてご案内しております。大会案内のプログラムと大会発表論文集の表紙の写真とデザインは、商学部近隣にお住まいのプロの写真家・デザイナーの花井雄也氏（アトリエ・フロール株式会社代表）にお願いをしています。とても美しいキャンパスイメージとなったと思います。大会スタッフとして、学部学生の外島ゼミナール28名、時田ゼミナールの33名、武田ゼミナールの３名、井上ゼミナールの18名、山本総合研究の13名の諸君に深く感謝いたします。大会における「教育発表」の参加、および、大会の準備と運営について、協力し合いながらお手伝いをいただいたことなくしては、大会の実施はできませんでした。学生諸君の貴重な青春の経験となっていれば、本大会の無事終了にも増して喜ばしいことと思います。さて、最後となり、外島の私事で恐縮ですが、70歳の年度末である2020年３月末をもちまして、23年間勤務した日本大学を定年退職となります。初めて私が学会発表をした1986年９月は明治学院大学での日本応用心理学会第53回大会でした。当時は実務の世界におりましたが、多くの先生方からのご指導を得て、今日まで皆様との交流を続けることができました。あらためて、御礼を申し上げます。日本応用心理学会におけます皆様のご研究とご活躍をお祈り申し上げます。本大会開催への多くの方々からのご支援に感謝申し上げます。

外島　裕（としま・ゆたか）／1949年 東京生まれ。日本大学大学院文学研究科心理学専攻修士課程修了。日本大学商学部経営学科・日本大学大学院商学研究科経営学専攻教授。主な担当科目、経営心理学、人的資源管理論、キャリア開発の心理学。応用心理士。

2019年度日本応用心理学会学会賞

［敬称略、所属は論文掲載当時、順不同］

論文賞

該当者なし

奨励賞

「看護学生の正確な指示受けのためのソーシャルスキルトレーニング
— 臨地実習で直面する困難状況を課題場面とした医療安全教育の試み —」

山本　恵美子（宮崎大学医学部医療人育成支援センター）
田中　共子　（岡山大学大学院社会文化科学研究科）
兵藤　好美　（岡山大学大学院保健学研究科）
畠中　香織　（大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻）

[掲載雑誌]
『応用心理学研究』 第44巻 第1号，70-80，2018

CONTENTS

[巻頭言] …… 濱　保久（北星学園大学） …… 1
[CONTENTS] …… 2
[CROSSROAD ESSAY] …… 蓮花　一己（帝塚山大学） …… 3
[特集] 日本応用心理学会第86回大会報告 …… 5
大会委員長からの報告 …… 外島　裕（日本大学商学部） …… 6
大会事務局・事務局幹事からの報告 …… 時田　学・山本　真菜（日本大学商学部） …… 10
大会スタッフからの報告① …… 佐藤　祐弥（日本大学商学部） …… 11
大会スタッフからの報告② …… 山岡　駿介（日本大学商学部） …… 11
大会スタッフからの報告③ …… 馬渕　里都（日本大学商学部） …… 12
大会スタッフからの報告④ …… 石田　大典（日本大学商学部） …… 13
研究発表（口頭発表） …… 軽部 幸浩・伊坂 裕子 …… 13
大会参加者からの報告① …… 南　隆男（慶應義塾大学） …… 14
大会参加者からの報告② …… 小松　健一（アキラ株式会社） …… 15
大会参加者からの報告③ …… 佐藤　舞（早稲田大学） …… 16
次回大会委員長の挨拶 …… 来田　宣幸（京都工芸繊維大学） …… 17
自主企画ワークショップ① …… 大橋 信夫・藤田 主一 …… 18
自主企画ワークショップ② …… 村上　裕子（東京海上日動メディカルサービス） …… 19
自主企画ワークショップ③ …… 林　潔（白梅学園短期大学） …… 20
自主企画ワークショップ④ …… 荻野　七重（白梅学園大学） …… 21
自主企画ワークショップ⑤ …… 浮谷　秀一（東京富士大学） …… 22
自主企画ワークショップ⑥ …… 田中　堅一郎（日本大学） …… 23
[ホープ登場 クロスロードの星] …… 24
若手奨励賞 …… 生田目　光（筑波大学） …… 24
発表賞 …… 高橋　綾子（東洋大学） …… 24
[職場探訪] …… 26
情報通信研究機構 …… 高橋　正人（情報通信研究機構） …… 26
[大学探訪] …… 27
①帝京科学大学 …… 石橋　裕子（帝京科学大学） …… 27
②滋賀短期大学 …… 林　幸範（滋賀短期大学） …… 28
[会員だより] …… 29
①青少年少女とすべての子どもの命を守る取り組み …… 佐藤　初美（10代・20代の妊娠SOS新宿―キッズ＆ファミリー） …… 29
②アラバマ留学体験記 …… 大工　泰裕（大阪大学） …… 30
③バンクーバー滞在記 …… 上瀬　由美子（立正大学） …… 31
④催眠メカニズムの研究 …… 清水　貴裕（東北学院大学） …… 33
[書評　おすすめの１冊] …… 34
●『虐待「親子心中」 事例から考える子ども虐待死』
●『自殺対策の新しい形　インターネット、ゲートキーパー、自殺予防への態度』
佐々木　美智子（志學館大学） …… 34
●『Progress & Application パーソナリティ心理学』… 浮谷　秀一（東京富士大学） …… 34
●『アスペルガー医師とナチス～発達障害一つの起源』… いとう　たけひこ（和光大学） …… 35
[トピックス] …… 36
若き研究者へ …… 内藤　哲雄（明治学院大学） …… 36
「鹿児島県令和元年度母子保健事業功労者知事表彰」にあたって …… 佐々木 美智子（志學館大学） …… 37
常任理事会通信 …… 38
国際交流 …… 角山　剛 …… 38
齊藤勇記念出版賞のご案内 …… 外島　裕 …… 38
機関誌編集 …… 軽部　幸浩 …… 39
広報 …… 田中　真介 …… 39
企画 …… 臼井　伸之介 …… 40
社会の具体的な問題解決に資する　学会賞 …… 木村　友昭 …… 41
事務局 …… 市川　優一郎 …… 41
応用心理学ハンドブック …… 藤田 主一・古屋　健 …… 42
学会史編纂 …… 藤田　主一 …… 43
学会活性・研究支援 …… 古屋　健 …… 44
倫理 …… 古屋　健 …… 44
学会だより …… 45
2019年度日本応用心理学会学会賞 …… 45
入会申込書 …… 46
「応用心理士」のご案内 …… 川本　利恵子 …… 47
編集後記 …… 48

蓮花 一己
（帝塚山大学心理学部）

交通心理学の現場での展開と学際・国際交流の大切さ

● 人間科学部での思い出

40数年前の高校時代に、新書版の社会心理学の本を読んだのがきっかけで、大学では社会心理学を勉強しようと思い立った。当時の大学では社会心理学の研究室は、一橋大学や東京大学を除けば、関西でなかなか見つからなかった。ところが、高校の担任の先生から、大阪大学に日本初の人間科学部ができると聞いて、高校二年生の終わりごろから、やる気が出てきて勉強を頑張りだした。何とか合格して、昭和47年（1972年）に大阪大学に人間科学部一期生として入学した。

ところが、入学した大阪大学豊中キャンパスでは、学生たちによる教養部のバリケードストライキが実施されており、入学後2、3ヶ月の間授業がなかった。そこで当時の同級生と一緒に『人間科学』という雑誌を作ったり、先生方の研究室を訪問して研究の話を聞くことが多かった。今となっては、お忙しい先生方の仕事の邪魔をしていたと恐縮するばかりだが、新入生のつたない質問をいつも真摯に受け止めて頂いた先生方には深く感謝している。その後も何となく過ごしていた自分が居場所としたのが、当時の文学部応用心理学研究室（後の人間科学部産業行動学研究室）であった。

当時は、太城藤吉先生が助教授を務めておられたが、やがて関西大学社会学部に移られ、大阪大学出身の長山泰久先生が追手門学院大学から着任してきた。長山先生の指導下で、暴走族研究、ソーシャルスピード研究、二輪車のアイカメラ研究などの交通心理学の諸研究が精力的に進められた。大阪交通科学研究会や国際交通安全学会などで、交通工学や社会学、自動車メーカーや行政の方々と協力して、時には激論をして行う研究が大変魅力的であった。筆者もこうした諸研究に末端でお手伝いをしたことが、その後、自分の研究を実施する際にも大いに役立った。

● 日本全国での高齢ドライバー研究

筆者は40年以上にわたり交通心理学の研究に従事しており、その多くがフィールド調査やフィールド実験であった。とくに、20年近く継続している高齢ドライバーの研究では、北海道から九州まで、全国で10数か所の府県の教習所で調査を実施してきた（図1，図2）。学生や研究室スタッフが中心になり、地元の高齢者の方々をお出迎えして、質問紙調査やハザード知覚検査、教習所での走行を実施してきた。言葉にすれば簡単なようだが、調査機材や質問紙等の綿密な事前準備、協力してくださる教習所の関係者、指導員との打ち合わせ、学生やスタッフとの事前研修は不可欠である。幸い、筆者の研究室には、代々優れた研究室スタッフが研究に関わってくれており、彼女たちが作成してきた調査マニュアルには、これらのすべての手順と留意事項が書き込まれている。

ここ数年は、高知県において、高齢ドライバーの軽度な認知機能低下や大脳皮質の変容が運転パフォーマンスに及ぼす影響について検証している。高知工科大学の研究者で脳ドックの医師である朴啓彰先生や近畿大学の交通情報系の研究者である多田昌裕先生と協力して、高知県内の病院や国内の自動車部品メーカー等の協力も受けて、学際的なチームで研究を進めている。

これからの応用心理の研究では、上記のような学際的なネットワークがますます求められると思

図1　教習所での走行調査

第86回大会の運営を終えて

佐藤　祐弥
（日本大学商学部〔外島ゼミナール21期〕）

今回、応用心理学会第86回大会を運営、サポートするという立場から参加させていただき、とても充実した時間を過ごせたと共に、学びの多い二日間でした。

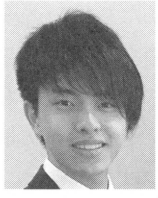
今回の学会を振り返り、良い点は2つあると考えています。1つ目として学生スタッフ一人一人が自らの役割の中で考え、行動していた事です。その要因として以前外島先生と一緒に伺った立正大学での第84回大会の見学での経験がとても役に立ったと感じました。2つ目は当日のアクシデントにも迅速に対応してくださった日本大学商学部の先生方、そして学会に参加された先生方の優しい対応があったことです。学生がどうしても対応できない事案に対してすぐに対応してくださった事で滞りなく運営を行うことができました。また参加された先生方は1つ1つのスタッフの行動に対して感謝の言葉を直接お伝えくださり、学生スタッフとしてはこの上ない幸せでした。

また今回の学会では、学生として初めてポスター発表に参加させていただきました。私達はチームでの研究を行い、リーダーシップ研究についての論文を発表致しました。各大学の先生方と同じブースでの発表という事もあり不安な気持ちを持っていましたが、研究を見てくださった先生方から、発表されている先生方と同じ立場として学生の論文を見ていただき、良い点、素直な疑問や改善点を直接お伝えくださった事が素直に嬉しく感じました。また、他の先生からは時代背景や場面考察をより深める事で一段と良いものになるなど、内容に関して具体的かつ私達の視点からは見つからない新たな視点からの考察を提示して下さる先生もいらっしゃいました。ポスター発表は初の試みという事でしたが、学生という立場からはとても有意義、そして充実したものでした。

この第86回大会では、先生方からのお言葉を多く頂けた2日間だったと感じています。運営スタッフ、そして大会参加者という2つの視点からこの応用心理学会を経験できた事は、学生スタッフ一同とても良い経験をした2日間でした。今回の学会を通じて参加された先生方、運営スタッフとして至らない点も多くありましたが、優しいご対応大変ありがとうございました。また、ポスター発表にて発表を見学、FBにて貴重なご意見ご感想をくださった先生方、本当に良い経験、学びとなりました。この場を借りて御礼申し上げます。

佐藤　祐弥（さとう・ゆうや）／ 神奈川県出身。日本大学経営学科4年経営マネジメントコース。記憶、不安感情とイップスの関係性について研究している。大学では野球サークルに所属して、勉強と並行しながら充実した大学生活を送っている。

日本応用心理学会に参加して



山岡　駿介
（日本大学商学部〔時田ゼミナール〕）

学生発表として、時田ゼミナールから産業部門と社会部門で2チーム、ポスター発表に参加させて頂きましたが、今まで自分たちが経験してきた発表の中で最もレベルの高い場であったと強く実感しました。それも名誉教授や著名な先生方の目の前で、自分たちが研究してきた努力の証を披露するのは、とても緊張しましたし、不安もありました。

ですが、心理学のプロフェッショナルと言っても過言ではない先生方たちの前であるなら、とことん堂々と発表して貴重なアドバイスを頂ける滅多にない機会でもあったので一研究者（の卵）と

育発表」に挑戦いたしました。企画をご理解、ご支援頂きました常任理事の諸先生方に感謝申し上げます。

教育発表は、本学商学部の外島ゼミナール（産業・組織心理学）4年生が5演題、時田ゼミナール（心理学）3年生が2演題、井上ゼミナール（消費者行動論）2年生が3演題、合計10演題です。発表の場所も、諸先生方のご発表と並んで配置いたしました。学部学生の発表に対して、温かくも適切なご指導を賜り誠にありがとうございました。また、学生から研究へのアドバイスのご記入をお願いし、丁寧なコメントを頂きました。学生たちにとって、またとない学修の機会となりました。（大会報告の一部として、学生からの参加の感想を載せております）。このような企画が、今後とも大会において永く実施されていきますことを切に期待いたします。以下に、企画の趣旨を大会ご案内のプログラムより再度ご紹介いたします。

「社会からの要請に対応するべく公認心理師が国家資格となりました。様々な社会での課題が提起される中で、応用心理学に対する期待はますます強まると思われます。心理学専攻の学生は無論の事、ひろく社会科学を学ぶ学生が、人間行動に理解を深め、学際的な観点からの学修、研究が深まることが必要と考えます。応用心理学という学問・実践の領域があることを若い後進に広げていきたいと思っています。今回の「教育発表」の企画が、今後とも各大会にて引き続き試みられ、多くの若手が応用心理学の領域を志すことを祈念いたします。お名前を研究論文やご著書で拝見している各研究領域でご活躍の諸先生方の謦咳に接し、直接のご指導を賜れば幸いです。学生時代の絶対に忘れることのできない貴重な経験となると存じます」。

■自主企画ワークショップ

本大会では6演題のお申し込みがありました。1日目としては、『応用心理学における「労働」研究のこれまでとこれから』（企画：大橋信夫先生・藤田主一先生）、『ストレスチェック法制化以降の産業精神保健－心理職の立場から考える職場・勤労者支援－』（企画：村上裕子先生・井上孝代先生）、『カウンセリング、心理療法へのアジアからの発信（3）：禅、森林散策カウンセリング、心身互動療法の視点から』（司会：林潔先生、高橋浩子先生）の3演題です。2日目では、『喪失の悲しみを超えて－マイクロカウンセリングからのアプローチ－』（企画：福原眞知子先生、荻野七重先生）、『地域性（県民性）を明らかにする－2か所以上の地域で暮らした場合の地域差について－』（企画：浮谷秀一先生）、『心理学における実践－現場研究の発信とその課題－』（企画：田中堅一郎先生）、の3演題です。いずれの演題も、現代社会で考えなければならないテーマであり、応用心理学会にふさわしく、実践との関連を提起した視点と関心を深めました。

■会員総会

1日目のお昼の時間帯に会員総会が開催されました。本大会においても参加いただいた会員の方にはお弁当をご用意いたしました。慣例に従い、大会委員長が議長に選出されました。

各委員会からの活動報告等の後、決算、予算が承認されました。また、名誉会員として、本学会前副理事長の谷口泰富先生が推挙され、満場一致で承認されました。なお、2018年度の学会賞の論文賞は該当がありませんでした。奨励賞（受賞者：山本恵美子・田中共子・兵藤好美・畠中香織共同各氏）と、若手会員研究奨励賞（受賞者：生田目光氏）の表彰がなされました。最後に2020年度第87回大会の大会委員長を務める来田宣幸先生（京都工芸繊維大学）からのご挨拶がありました。

（なお、2日目のお昼休みには、ウルトラマン商店街の何軒かのお店からお弁当の協力を得て、ご案内いたしました）。

■シンポジウム

1日目午後には、『グローバル人材の育成－大学での留学制度の活用からグローバル・コンピテンシーへの発展』と題した大会委員会企画シンポジウムを開催いたしました。多文化共生社会の中で、適切な行動が課題となります。そのために、大学での留学制度のありかた、大学生の留学を支援する自己理解のレディネス形成とフォロー、そして国際人事における人材の必要要件等を話題として

討論を深めたいと企画したものです。話題提供として、眞谷国光氏（早稲田大学総長室/国際部）『近年の大学における留学の動向および留学による学生の変容－早稲田大学の事例より－』、橋上愛子氏（東京海上メディカルサービス㈱健康プロモーション事業部EAP室）『大学のグローバル化を支える留学のリスク管理と留学の成果－「留学生メンタルヘルス支援プログラム」から「グローバルキャリア開発プログラム」への展望』、ブライアン・シャーマン氏（グラマシー・エンゲージメントグループ㈱代表取締役社長）『グローバル経営時代の人材に必要な要件、育成について』の３先生方からお話を頂きました。それを受けて指定討論として、白木三秀氏（早稲田大学政治経済学術院教授）『「グローバル人材」や「グローバル・コンピテンシー」とはなにか』、井上孝代氏（明治学院大学名誉教授）『自分らしくキャリアをデザインすること－「文化の懸け橋」と「幸福な生き方」』と題して、発展的な討論が展開されました。司会は外島裕が進行し、フロアーの参加者からは、留学カウンセリングのあり方、海外勤務の課題など、いくつかの質疑が熱心に取り交わされました。

■特別講演

大会委員会企画特別公演は２日目の午後に開催いたしました。本大会では、本学文理学部心理学科教授の横田正夫教授にご講演をいただきました。演題は『アニメに見る「感情の谷」』です。横田先生は、前日本心理学会理事長、心理学諸学会連合理事長などをお勤めでもあり、広く心理学会全体に対してもご貢献です。なお、本第86大会では大会委員会の顧問をお願いしています。横田先生は本学芸術学部映像学科をご卒業の後、本学大学院文学研究科心理学専攻博士課程を修了し、病院臨床の経験を通して臨床心理学のご研究を深められました。今回のご講演の内容は、まさに横田先生の経歴と研究領域にふさわしく、アニメの代表的な作品に登用する主人公の心理的危機の過程を「感情の谷」として概念化して、それと統合失調症の心のあり方との対比で理解し論じ、極めて興味深い考察でした。クールな日本のカルチャーとしてのアニメが人気ですが、読者の心の投影としての臨床心理学による解釈は、現代の心のあり方に対する問題提起を含み、誠に貴重な研究の成果でした。

■学会研修会

例年のように、企画委員会による学会研修会が実施されました。１日目の午後には、研修会Ａとして、高史明先生（神奈川大学人間科学部）による『インターネット上の言説の分析－偏見・差別研究を題材に－』が論じられました。まさに、情報化社会での影の部分である偏見・差別について、研究方法も含め重要な問題提起と思われます。２日目の午後には、研修会Ｂとして、内藤哲雄先生（明治学院大学国際平和研究所）による『PAC分析の理論と実施技法』の丁寧なご説明がありました。内藤先生によるPAC分析は、すでに多くの研究において活用され実績を示していますが、あらためて基本を確認することの貴重な機会となったと思われます。

■懇親会

本大会参加の皆様の懇親会は、１日目の夕刻６時頃から開かれました。場所はキャンパス内の食堂アゼリアです。本学商学部長である嶋正教授より皆様にお越しいただけました御礼を申し上げました。藤田理事長、外島大会委員長の挨拶の後、本学会元理事長、名誉会員の岡村一成先生より乾杯のご発声を頂きました。司会は本大会副事務局長の山本真菜先生が勤めました。例年と同様に、諸先生方は、親しく歓談をなさっていました。懇親会に初めて参加をしたとの某先生から、応用心理学会の雰囲気はとてもアットホームで居心地が良い、またぜひ参加していきたいとの感想をいただきました。懇親会では、2018年度第85回大会の優秀大会発表賞の表彰がおこなわれました。口頭発表部門（研究代表:上田真由子氏）、ポスター発表部門７演題（研究代表：小林剛史、埴田健司、小林寛子、藤野美香、内田誠也、高橋綾子、中野友香子各氏）でした。参加の受賞者の方々は、これを励みとしてこれからも良い研究を発展させていきたいと意欲をお話しになりました。盛況のうちに、次期大会委員長の来田宣幸先生が、開会開

カウンセリング、心理療法へのアジアからの発信（3）

林　　潔
（白梅学園短期大学）

このワークショップは、この地域外の人々には情報発信を、地域内の人々にはこのような取り組みが行われていますという再確認を意図して行っています。

前回に引き続いて、加藤博己先生、及び小室央允先生から禅について伺いました。駒澤大学は、本学会大会を開催された秋重義治先生以降、禅の心理学的、生理学的研究の長い伝統があります。

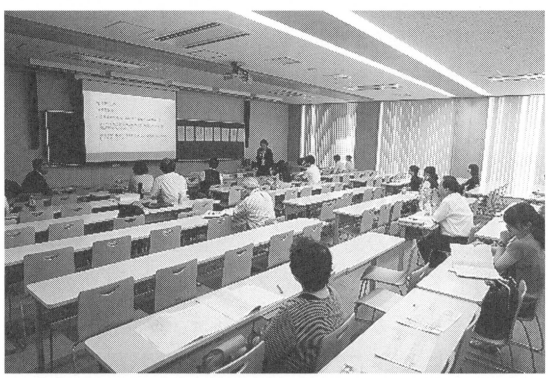
マインドフルネスは禅の影響を受けているとよくいわれます。それでは、現在行われているマインドフルネス瞑想と、禅の瞑想と、同じレベルで考えられるのか。ここで、止、観、念という用語が出て来ます。一般人にはなじみが薄い言葉も分かりやすく説明されました。

本格的な座禅のほかに、椅子座禅の紹介がありました。この方法であれば、日常的なセルフコントロールの手続きとしても実行できそうです。

精神科医サールズの「ノンヒューマン環境論」という本があります（邦訳　みすず書房）。人のこころを支え、伸ばしていくものは、人間だけではないでしょう。山中湖近くの東京大学の富士癒しの森研究所では、附属演習林を舞台とした森林散策カウンセリングが行われいます。森林という非日常的な場面で自分を見つめ直す試み。竹内啓恵先生の話題提供です。

伝説の黄帝以降というか、中国には古くからさまざまな養生法が生まれています。今日それらの試みについて、科学的な視点から捉え直し、発展させようという動向があります。前回は認知行動療法の活用でした。今回の身心互動療法は、モンゴルの伝統的な療法に現代の技術を応用する手続きです。しかし、李同帰先生の来日が遅れたために紹介は次回になりました。

今回はフロアからの質疑応答の時間をとることはできませんでした。そのために、次回の京都工芸繊維大学での第87回大会の時の第4報告では、今回と同一の話題提供者によって、第3報告の続編、実技編として実施する予定です。



林　潔（はやし・きよし）／ 1961年、立教大学大学院応用心理学専攻修了。白梅学園短期大学名誉教授、Australian & New Zealand Student Services Association名誉会員、中国陝西省心理諮詢師協会名誉顧問、元日本行動医学会理事。【共訳・分担訳】『アメリカの女子職業と再教育』（図譜出版）、『カウンセリングの革命』『行動カウンセリング』『家族と家族療法』『抑うつの認知行動療法』（誠信書房）、『原因帰属と行動変容』（ナカニシヤ書店）、『アメリカの産業カウンセリング』（日本文化科学社）、『スーパービジョンの技法』（培風館）。

して、ゼミナール生として、とても良いきっかけになったと思います。

実際、発表した感想としては、無我夢中で発表していたこともあり、あっという間に時間が過ぎ去っていったという感じでした。自分たちの研究の成果を披露するには、良い意味であまりにも短く濃い時間でした。学生発表のポスターを気に留めてくださる方なんて居るのかとはじめは不安に思っていましたが、当日たくさんの先生方に発表を聴いて頂けて、とても嬉しかったです。また、研究内容についてお褒め頂けたり、今後の研究のためのアドバイスを頂けたりと、今日までゼミナール生と一緒に研究を頑張った甲斐があったと達成感も改めて実感させて頂けた良い大会でした。プロフェッショナルの研究者の先生方から頂けた意見やアドバイスは、今後の自分たちの研究に生かせる大変貴重なものばかりで、確実に今後の財産となるものを得ることができました。このような経験ができるのは、まさに心理学が科学的学問ならではと思いますし、科学の神髄だと実感いたしました。

私たちは、普段のゼミナール活動では、教科書や論文の発表をしており、それらの発表の質を向上させるためにも色々な参考文献を活用しています。その参考文献の著作者が書かれたポスターを見つけたときは、一種の感動を覚えました。まさか、ここでポスター発表の発表者としてお目にかかれるとは本当に貴重な空間であり、改めて研究内容に興味や関心が湧いてくる面白い場でした。

今回、この日本応用心理学会が在学する大学で開催され、それに参加できたことは本当に大変貴重な時間と空間でしたし、今後のゼミナール活動のモチベーションにも繋がりました。加えて、プロフェッショナルの先生方の目の前で発表させて頂く機会を獲得し発表できたことは、この先も一生忘れない濃い糧となったと感じています。そしてそれを味わうことができて、とても楽しかったです。本当にありがとうございました。

山岡　駿介（やまおか・しゅんすけ）／ 東京都生まれ。日本大学商学部商業学科在学中。予てから心理学に興味を持っており、２年次に心理学研究を専門としている時田ゼミナールに入室し、以後ゼミナール長としてゼミ活動に励む。アルバイトで塾講師をしていることから教育心理学（特に動機づけ）を中心に論文を輪読している。本学会での経験を活かし、質の高い充実した卒論研究をしていきたいと考える。

応用心理学会を終えて

馬渕　里都
（日本大学商学部〔井上裕珠ゼミナール〕）

今年の日本応用心理学会第86回大会において井上裕珠ゼミナールから２年生10人でポスター発表に参加させていただきました。ポスターは３チームで分かれ、「モデルの体型が購買意欲に及ぼす影響―制御焦点に注目して―」「老舗の『重み』が商品評価に及ぼす影響」「カロリーはどこに表示すべきか？―カロリー表示位置が食品選択に及ぼす影響―」のテーマで発表を行いました。井上裕珠ゼミナールでは消費者行動を社会心理学の観点から研究しています。また質問紙実験を行い、データを統計的に分析する方法やその解釈についても学んでいます。２年生は井上先生のご指導の下、日本応用心理学会で発表することを目標に５月より本格的に研究活動に取り組んで参りました。実際に質問紙実験を実施し、分析ツールを用いて質問紙実験のデータの統計的な分析を行いました。先輩方にも研究についてフィードバックをいただき、ポスター発表のために研究の精度を上げるためにチームで取り組んできました。チーム内で活発に意見交換をしたり、時にはほかのチームからアドバイスをもらったりもしました。私たちの研究成果をたくさんの先生方に評価していただける初めての機会で大変緊張しておりましたが、自分たちの視点になかった評価をいただき、たくさんの刺激を受けました。私たちの研究の問題点や改善点も見つかり、今後の研究活動の指標を把握す

地域性（県民性）を明らかにする
－2カ所以上の地域で暮らした場合の地域差について－

浮谷　秀一
（東京富士大学）

企画・司会：浮谷秀一（東京富士大学）
話題提供者：桐生正幸（東洋大学）
話題提供者：川本利恵子（湘南医療大学）
指定討論者：齊藤勇（立正大学）
指定討論者：玉井寛（AOI国際福祉専門学校）

第85回大会（立正大学：古屋健大会委員長）のシンポジウムにおいて、『ことばの県民性（方言）が現在も存在するのか　－生まれてから続けて特定地域で暮らした人の場合－』という題目で、二宮克美氏（愛知学院大学：愛知県）、鈴木智子氏（福島学院大学：福島県）、菊池やす子氏（教育相談員：茨城県）にことばの特徴を中心に、地域差を明らかにすることを目的に、同一地域で長く暮らしていた人に登壇いただいた。しかし、同一地域で長く暮らしていたとしても昔と違って他地域の情報を容易に知ることができるということで、思っているほどの違いを見いだすことが出来なかった。そこで、今回は、同一地域で暮らしたかではなく、いろいろな地域の暮らしを経験した人に登壇していただき、個人の感じた地域の違いを話していただくことによって地域差を明らかにしようとした。

桐生氏は、山形県（東北地方）・兵庫県（関西地方）・東京都（関東地方）に暮らした経験を踏まえ、各地域の紹介、妖怪心理学の観点から、お酒とお肉の観点から、犯罪心理学の観点から各地域の違いについて話していただいた。各地域の紹介では、山形県については４つ地域に分かれていてその地域ごとに方言があると、兵庫県についてはまさしく合衆国であり、多様な歴史と文化があると、東京都については多くの島々を含んでいて広範なために一概に語れないと紹介された。妖怪心理学の観点から、山形県の「雪女郎」、兵庫県の「砂かけ婆」、東京都の「通り悪魔」といった代表的な妖怪が紹介された。お酒とお肉の観点から、各地域に特徴的なお酒のお肉の銘柄が紹介された。犯罪心理学の観点から、山形県は刑法犯罪や重要犯罪が少ない都道府県で上位に位置し、兵庫県は刑法犯罪と重要犯罪が多い都道府県の上位に位置していると統計結果が紹介された。各地域で暮らすことで感じる身近な例をいろいろと紹介された。

桐生氏の話題提供に対して、玉井氏は、自身の福岡県豊前時代、東京都で暮らした大学・大学院時代、社会人時代、その後の福島県福島市時代、加えて中国の張家口市、北京市での経験談を紹介した。齊藤氏は、山梨県南アルプス市時代、東京都の渋谷区・小平市時代、埼玉県狭山市時代を振り返るとともに、アメリカのカリフォルニア時代、韓国ソウル時代、さらに台湾やフィリピン暮らしについての地域での違いについて経験談を紹介した。

川本氏は、当日体調不良のためお話を伺えませんでした。九州地方での経験をお聞きできることを楽しみにしていたのですが…。

時間に限りがあるため、指定討論者の齊藤氏と玉井氏の経験談については十分時間を取ることができず短い時間になってしまったことは残念であった。

今回のワークショップによって、いろいろな場所で暮らしたことがある経験談を積み上げていくことが有効であることがわかった。今後はこの方向で進めていこうと考えている。

浮谷　秀一（うきや・しゅういち）／1953年 千葉県市川市生まれ。東京富士大学特任教授。日本応用心理学会理事、日本パーソナリティ心理学会理事。現在興味のある主なことは、「地域性」「血液型性格判断」「EQ（Emotional Quotient）」。日本応用心理学会企画 シリーズ『現代社会と応用心理学』（福村出版）第５巻「クローズアップ メディア」第１巻「クローズアップ 学校」に編著者として関わった。他に、シリーズ『心理学と仕事』（北大路出版）第９巻「知能・性格心理学」編著がある。

など沢山の貴重なご助言、励ましのお言葉を頂戴する事も出来ました。心から感謝申し上げます。

私がスポーツ選手を対象とした心理的サポートに興味を持ったきっかけは、高校時代に遡ります。所属していた野球部が、県内の優勝候補として注目を浴びるほど、実力的には高かったと自負しています。しかしながら、結果は3回戦敗退という内容に終わってしまいました。その経験から、心理面の必要性に注目するようになり、現在に至っています。とは言え、まだまだ実践者としても研究者としても未熟であり、日々自己研鑽を続けている状況です。機会がありましたら、ご指導いただければ幸いです。

このような、振り返りの機会をいただき、大変感謝申し上げます。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

小松　健一（こまつ・けんいち）／長野県生まれ。2008年東海大学大学院体育学研究科体育学専攻修士課程修了。2011年には、山口県体育協会やまぐちスポーツ医・科学サポートセンターにて国体選手の心理的サポートを担当。現在は、アキラ株式会社に勤務し社員のメンタルヘルス相談などに従事している。

大会を振り返って

佐藤　舞
（早稲田大学）

日本応用心理学会第86回大会において、「母親の就業形態と大学生の就業観および性役割態度の関連」という題目でポスター発表をさせていただきました。結論から言うと、予め立てていた仮説は支持されなかったのですが、かえって興味深い結果が出たので、報告させていただきました。

その結果とは、①現代の大学生は男女とも「仕事も家事も男女平等」という意識を強くもっている。②にもかかわらず、男性は女性ほど、働くうえで育休などの休みが取れるかどうかを重視していない、というものです。「仕事も家事も男女平等」と考えているはずの男性は、誰が時間を取って家事・育児をやると思っているのでしょうか。この意識のズレがある若者どうしが、そのまま就職し、結婚すればどうなるでしょう。育児のために急遽、仕事を休まなくてはいけないときは、休みを取りやすい職場を選んだ妻がいつも休む、ということになりかねません。キャリアや働き方が制限されるのは女性ばかり、という状況に追い込まれてしまうでしょう。「もっと平等に家庭のことを考えて」と妻が不満を訴えても、男性は平等意識は強いので、「男女平等に家事も育児もできる方がやるべきだと僕は思っているのに、これ以上平等に考えろと言われても」と、お互いにすれ違ってしまうかもしれません。

発表の際は、男女の働き方やキャリア形成に興味をお持ちの方々が多くいらしてくださり、ご質問や研究方法へのご助言を賜りました。今後の研究に向けて、とても参考になるご意見ばかりで、心より感謝申し上げます。なかには、心理学を専門としていらっしゃらない方も多く、普段の私の目線とは異なる多様な観点からのご意見を伺うことができ、貴重な経験となりました。さらには、あたたかい励ましのお言葉を賜り、研究への活力をいただきました。一人で研究していると、「この研究は意義あるものなのか」、「誰かの役に立てているのだろうか」ということを疑問に感じてしまうときもあるのですが、発表にいらしてくださった方々のお話を伺って、目標とやる気を新たにいたしました。大変うれしく思います。

最後になりましたが、大会参加について改めて振り返る機会をいただき、この場を借りてお礼申し上げます。これからも研究を続け、その成果を報告し、大会に参加・貢献していければと思います。今後とも、よろしくお願い申し上げます。

佐藤　舞（さとう・まい）／2018年早稲田大学より博士学位（文学）取得。早稲田大学教育学部教育心理学教室助手を経て、現在は非常勤講師。専門は教育心理学、社会心理学、キャリア教育。特に、大学生の就職活動をテーマに研究を行っている。

若手会員研究奨励賞
受賞によせて

47 生田目 光
（筑波大学大学院）

この度、「Fear of happinessの影響におけるマインドフルネスの媒介効果－ポジティブ心理学第２の波に着目して－」というテーマで若手会員研究奨励賞をいただきましたこと、大変光栄に思います。

これまでの心理学の研究では、ポジティブかネガティブのいずれかに焦点を当てることがほとんどでした。たとえば、ポジティブなものとしては幸福感やQOL、ネガティブなものとしては不安やうつ等について研究されてきました。しかし、私たちの実際の暮らしの中では、ポジティブかネガティブに単純には分けられない、複雑な気持ちや考えが出てくることも多いと思います。そこで、本研究では、今まで焦点が当てられることの少なかったアンビバレントな状態として、“Fear of happiness”という概念を取り上げました。

Fear of happinessとは、幸せは悪いことを引き起こすかもしれないため，避けるべきであるという信念のことで、特に、日本などのアジア圏の人によく見られる信念です。Fear of happinessが高いと、幸せや喜びといった感情をありのままに体験することができず、幸福感が低くなってしまいます。

このようなFear of happinessによる悪い影響を緩和するために、マインドフルネスに着目しました。マインドフルネスとは、今この瞬間の経験をありのままに体験することです。したがって、マインドフルネスが高い状態であれば、感情をありのままに体験することができ、Fear of happinessによって幸福感が低くなるのを食い止めることができるのではないかと考えました。

本研究は、まだ実施途中ですが、もし予想通りの結果が得られれば、実践的な応用が期待されます。たとえば、マインドフルネスを高めるプログラムは、日本でも普及しつつありますので、Fear of happinessが高い方に対して、それらのプログラムを実施することで、幸福感を高め、より充実した人生を送れるようにサポートすることが可能になるかもしれません。本研究を通して、実生活に応用できるような実用的な知見を提供できるよう、研究に励みたいと思います。

生田目 光（なまため・ひかり）／ 茨城県つくば市出身。早稲田大学卒業後、筑波大学大学院へ進学。現在、筑波大学大学院博士課程に在籍。研究分野はボディイメージで、摂食障害予防についてポジティブ心理学の観点から研究している。

発表賞

48 高橋 綾子
（東洋大学大学院）

この度はこのような名誉ある賞をいただき、大変光栄に存じます。私の研究テーマは「妖怪の社会心理学的研究」です。今回ポスターで発表をいたしました「妖怪の生起メカニズムと社会的役割の検討　－代表的な妖怪の類型化と現代における代替物－」は、その一環として実施した２つの研究を報告したものです。日本における代表的な妖怪を妖怪辞典の内容分析によって類型化し、その結果をもとに、本来妖怪に備わっていた役割を現代では何が代わりに担っているのかについて検討しました。

現在に至るまで、妖怪研究は民俗学や文化人類学を中心に行われてきました。妖怪の定義や捉え方は、その種類の多さや、時代とともに変化する特性などから多種多様ですが、前述した分野の研究で共通して言及されているのは「妖怪」と「心」の関連です。一方、人間の心を研究対象とする心理学においては、妖怪に特化した研究はほとんど

ジェクト―」なるものが全学的に始動されており、このことも意識されての、応用心理学会大会行事への自主参画への招待でもあった、ということでしょう。

結果的には、10の「教育発表」があり、わたしは、“頑張って”その全部に参加した次第です。

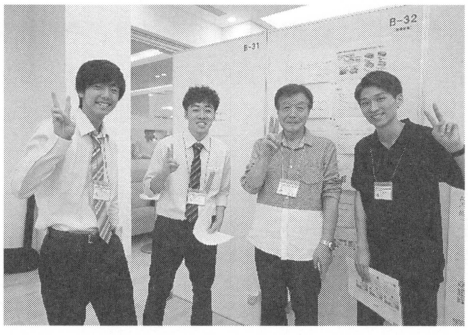
発表されてる学生諸君も、遣り取りをされてた会員の皆さんも、和気あいあいとして、かつ、活発な意見交換がみなぎっており、とてもいい感じのものでした。

なかでも、わたしは、「カロリーはどこに表示すべきか？―カロリー表示位置が食品選択に及ぼす影響―」（庄子　遼・杉田篤也・畠　文槻）には感じ入りました。レッキとした実証（実験）研究であり、カロリー表示（=食品サンプルの右側か左側かの表示）は、食品選択には無関係、が明らかに。データの分析もすごくソリッド！

では、食品サンプルの上部か下部かの表示ではどうなるのか？　そのことが気になってきて、秋学期に学内食堂の協力を得て、食堂利用者を被験者にして確認をする、のだと。その現場実験の手続きもナルホドと…。

「御三人が二年生であられた」ことにもビックリしちゃった南　隆男・75歳　おじ(い)さんではありました（笑）。

「教育」発表との名前で登場した、今次大会での、この“新しい”試みは、大会の「ポスター発表」に相乗りさせての実行にはさほどの難しさもないように思われ、以降の大会にあっても試みられてもよいのでは！　そのような感想を強く持った次第です。



南　隆男（みなみ・たかお）／ 日本応用心理学会名誉会員・同学会認定「応用心理士」。産業・組織心理学会名誉会員。日本心理学会終身会員。人材育成学会理事。（慶應義塾大学名誉教授・Ph.D., University of Illinois, U.S.A.）

大会に参加して

小松　健一
（アキラ株式会社）

この度、日本応用心理学会の会員になり、第86回大会より初めて参加させていただきました、アキラ株式会社の小松と申します。この学会には、学生の頃からお世話になっている、京都工芸繊維大学の来田宣幸先生の推薦を頂き、入会させていただきました。

私自身は、スポーツ選手を対象に競技力向上を目的とした心理的サポート（主にスポーツメンタルトレーニング）の効果的な実践方法について研究を行っております。今回は、「高校弓道選手に実施した心理的サポートの事例研究」という題目で、ポスター発表をさせていただきました。この研究では、A県の弓道少年国体選手に約３ヶ月間実施した心理的サポートが心理的側面にどのような影響を及ぼしたのかを検証致しました。結果として、スポーツ心理テスト（心理的競技能力診断検査）の得点が向上している（心理的側面にポジティブな影響を与えている）事がわかりました。今後の課題としては、心理的サポートの期間が３ヶ月間という短い期間だったため、長期間実施した際には、どのような影響があるのかさらに検証する必要があるという課題も見つかりました。このような発表に対して、色々な先生方から「生理的指標と組み合わせると面白いかも」、「弓道って本当に心のスポーツだよね、参考になりました」

ストレスチェック法制化以降の産業精神保健
～心理職の立場から考える職場・勤労者支援～

村上　裕子
（東京海上日動メディカルサービス株式会社）

企画：村上裕子（東京海上日動メディカルサービス）、井上孝代（井上孝代マクロカウンセリングセンター）、司会：井上孝代、話題提供：大林裕司（心理支援ネットワーク心PLUS）、高見澤由紀（産業能率大学）

働く人々の心の健康の大切さは誰もが認めるところです。ホワイト企業、ブラック企業などという言葉が頻繁に登場し、職場の働きやすさが重要視されるご時世ですが、では実際に組織がどんなふうに従業員の心の健康を守っていくのか、と問われると、イメージが難しいのではないでしょうか。その一つの方策として、国が一定規模の職場に対して、従業員へのストレスチェックの実施を義務としてから4年が経ちました。ストレスチェックによって、従業員が自らの状態に気づき予防や必要な対応ができるようにする、心の健康診断のような仕組みです。高ストレスの人には、医師との面談の機会を提供することが職場に義務付けられていますが、この先はストレスチェックの実施だけではなく、組織の心の状況を把握し、よりよい職場づくりのために職場環境改善活動をやっていきましょう、小さな職場でもストレスチェックをやっていきましょう、という流れになると考えられています。そんな中、現場で活動している心理士が集まって、現状を共有しつつ一緒に考えてみようじゃないか、ということで、このワークショップを企画することにしました。

企画者も話題提供者も、カウンセラーとして倫理と臨床の両方を視野に入れつつ、現場で働く人の支援を様々な形で実践しています。当日は、ストレスチェックに関する法律の簡単な説明の後、実際行っている研修や面談、グループワークを元にした職場環境改善活動、うまくいくことといかないこと、現場で活動する際にベースになる理論やツール、といったものを、シンポジウム形式でご紹介しました。支援対象になる職場は規模も状況も様々なので、どうなりたいのか、何をしてほしいのかのニーズも多様です。社内でも人によって思いは様々ですので、職場環境改善活動を、といっても温度差があるものですし、変化を望まない人も出てきます。そういった様々な局面がありつつも、職場のキーパーソンになるのがマネージャーです。近頃は管理監督業務のみならず実務も担当し忙しいことの多い層ですが、職場環境改善のカギを握るマネージャーをエンパワメントすることの大切さをお伝えしました。フロアから貴重なご意見や重要なご指摘をいただきましたこと、この場をお借りして感謝申し上げます。

心理学を活かして、働くという人間の社会生活の大きな部分を支援していくのは、大きなやりがいを感じられる活動です。こういった産業精神保健の分野に興味を持ってくださる研究者や臨床家が、今後も増えていくとよいなと願っています。

村上　裕子（むらかみ・ゆうこ）／ 企業で勤務の後、働く人の支援を目指し、再度心理学の世界に。立教大学院文学研究科心理学専攻博士課程前期課程修了。産業臨床や多文化間メンタルヘルス、災害支援が主なフィールド。臨床心理士、公認心理師。

TOPICS

若き研究者へのメッセージ

高みを目指して
―挫けても、愚痴っても、泣いても構わない―

内藤　哲雄
（明治学院大学）

今年も例年のように海外での学会大会発表に参加した。7月のヨーロッパ心理学大会ECP2019（モスクワ）、同じく7月のアジア社会心理学会大会AASP2019（台北）、8月のアメリカ心理学会大会APA2019（シカゴ）である。それぞれの大会で意想外の共通印象を得た。これまで活発だった日本人若手研究者（とくに大学院生）の発表にほとんど遭遇しなかった。中高年の発表も少ない。日本の研究の将来に危機を感じた。

今では日本も韓国も少子高齢化で、大学入学人口が激減しており、大学院生の就職先も激減している。ソウル大学で博士課程の学生募集を停止したところがあると聞く。日本の国立大学の教員給与は減少を続け、経常経費確保のために研究費も削減されており、交付金縮小から教授ポストも減少し、今後は准教授で定年を迎える人が少なくない。退職者の後任人事は人員削減による募集停止が続いており、たまにある募集でも「職位は准教授以下の任期付き」特任が多い。時々見かける大学院修了後の若手への公募は、2～3年任期付きの助教が大半である。職を得たらすぐに次の応募準備をするのが実情である。助教での異動を繰り返した後、非常勤講師だけで生活する研究者も珍しくなくなった。私立大学では学生定員を確保できず、経営危機に陥っている大学も少なくない。若手枠の年齢を超えた現職教員が科学研究費に申請すると、70歳を超えて申請する業績抜群の研究者と競争となり、採択は厳しい。私の知人は、75歳を超えても連続して採択されている（人生百年時代にはふさわしいが）。学生も教員も夢を失い、大学院進学者は社会人入学を除けば少ない。

筆者内藤の若い頃も募集が少なかった。博士課程の同期が就職していくのに、この私にはなかった。生活にも窮して建設現場で働いた。学業にのみ邁進しない学生というので、「学生証を持った乞食」と叱責された。忸怩たる思いであった。当時東洋一の地下ガスタンクの建設現場で、キャップタイヤを引きずりながら電気溶接の仮止めをしていた。朝から雪が降り続き、対岸の川崎が見えず、空も海もコバルトブルーだった。大学入学前にもしていた仕事だ。「木に竹を接ぐ人生」との強烈な絶望が湧き上がり、人の目を遮る電気溶接の面の裏で嗚咽した。涙がぼろぼろこぼれた。誰かが職に就くと、もう一人の誰かが職に就くチャンスを奪われる。職に就いている人は、生活費、研究費が支給され、紀要等の発表の機会もある。著書の分担執筆にも誘われやすい。専任歴・教職歴がある方が、次の応募でも採用されやすい。職のない者は、「霞を食べる仙人」のごとく、すべてを自力で確保するしかない。旅費がなくて、研究費がなくても、成果を上げねば、「意欲、能力、資質の欠如」と同じである。資産も実質的には能力である。才能であるとさえいえる。恵まれた人の何倍も成果を上げないと、採用は厳しい。確かに、業績がありすぎる方が敬遠されることもある。しかし、優れた業績を蓄積していれば、いつか、どこかで採用される可能性がある。運だけでの採用を期待すると、外れ続けたときの人生は厳しい。

あの雪の日の建設現場で、「もし万が一私が研究者や大学教員になることがあったなら、今一人の人のチャンスを奪うことになる。『内藤なら許せる』『内藤の方が良かった』と言われる研究者になろう」と、拭いきれない涙で覚悟した。その後、週刊誌の雑仕事、小さなマーケッティング会社の常勤、企業の調査、家庭教師など転々とした。大学に次々と応募しては、「遺憾ながら貴意に沿うことができません」の不採用通知を受け取った。36歳6カ月の時ようやく、医療技術短期大学部一般教養のポストを得た。応募者は20倍を超えていた。その後さらに応募を続け、信州大学人文学部に異動し、11カ月後に教授となった。日本社会心理学会の会報に「中高年の活性化」の随想を執筆

応用研究における現場の大切さ

濱　保久（北星学園大学）

私が若かりしころ勤務していた国立大学の卒業祝賀会で新しい門出に胸躍らせる学生を前に文学部長が開口一番「諸君がこれまで学んできたのは虚学である！」と切り出されたのにはひっくり返りそうになった。もちろんその後には、工学などの実学と比べるとインド哲学やら美学やら直接的に世の役に立つ可能性が少ない学問の重要性を述べられたのではあるが、当時文学部に位置付けられていた心理学って……と考えさせられた。

心理学にも基礎的分野と応用的分野がある。極論かもしれないが、私は心理学に限らず基礎的研究は三振続きでも何十年かに一度特大ホームランがあればそれだけで十分だと思っている。つまり近視眼的成果を求めなくてもいいと思っている。しかし、応用的研究はそれではいけない。応用的研究には解決すべき具体的課題が実社会の現状にあるはずであり、その点が基礎的研究と決定的に違う。臨床医学で考えれば目の前の患者を治さなければならないのである。まだ基礎医学の研究が整っていないとか新薬の承認が下りてないとか言い訳はいくらあったとしても、とにもかくにも目の前の患者を楽にしてあげなければならないのである。所与の条件で、環境で最善の処置をするために臨床医は基礎医学や薬学にも詳しくなければならない。

その昔、形状記憶合金という物質が偶発的に基礎研究から誕生したことがあったが当の研究者はこんなもの何の役に立つのかしらと思いながらもとりあえず発表した。ところが某下着メーカーの研究者がその特性に着目。ブラジャーのワイヤーに取り入れる研究に着手し、洗濯して変形したワイヤーが肌の温度で新品の形に戻るという画期的製品に結びつけた（まさか当初の基礎研究者は形状記憶合金がブラジャーに活用されるとは思っても見なかったはずである）。某下着メーカーの研究者は日々、洗濯で変形するワイヤーを何とかならないものかと考え、広範囲にアンテナを張り巡らせていたのであろう。そして形状記憶合金という新しい素材に出会ってからも幾度となく試行錯誤を繰り返したに違いない。

このエピソードを心理学の応用研究に当てはめて考えると次のように要約できるのではないだろうか。1）研究課題は研究室の中ではなく常に実社会の現場にある（あるべきである）。2）その課題解決のために必要な知識や道具は多様であるから応用研究に携わる者は広範囲な基礎領域にも精通していなければならない。3）論文の執筆、完成が最終ゴールではなく、真の課題解決に到達するまで研究室と実社会の現場との窓を閉めることなく何回ものやり取りを繰り返し、時として仮説を修正しながら最終ゴールまでもっていく粘り強さが不可欠である。

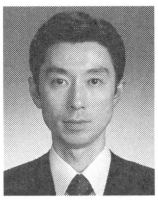
つまり、応用研究はそのスタートもゴールも実社会の現場抜きにしては意味を成さず、それを忘れた研究は、もはや応用研究とは呼べず、また基礎研究とも認められず、ただの業績のための研究に成り下がってしまう危うさを内包しているのである。

濱　保久（はま・やすひさ）／ 北星学園大学、教授・副学長。社会心理学をベースに、接客サービス、生産者と消費者のコミュニケーションなど主にコミュニケーションに関わる研究を進めてきた。これまでに、民間サラリーマン、公務員、教員などを経験し、後やり残したことは職人と商いくらいになった。定年を機にいずれたこ焼き屋を開店したら全クリかも。

職場探訪

▶国立研究開発法人 情報通信研究機構◀

わが国の未来を拓く科学技術政策と応用心理学との接点



高橋　正人

私の職場、国立研究開発法人情報通信研究機構（NICT）は、情報通信分野を専門とする我が国唯一の公的研究機関として、情報通信に関する技術の研究開発を基礎から応用まで統合的な視点で推進しております。

新しい情報通信技術によりサイバー空間はさらに充実・拡大しており、実空間との融合が急速に進展し、新たな生活空間となるサイバー・フィジカル空間が形成されてきております。それに適した形への変革の必要性に迫られています。このようなパラダイムシフトに対応するため、

1．ICTにより実世界を「観る」、
2．無線や光などの通信技術により社会を「繋ぐ」、
3．データの利活用により新たな価値を「創る」、
4．巧妙・複雑化するサイバー攻撃から社会を「守る」、
5．情報通信の新しい地平を「拓く」、

という５つの柱の下、世界最先端の研究開発に取り組んでいます。

こうした国の研究機関において、衛星通信や衛星測位工学の研究者として国際特許も米英独仏豪日等の先進各国で20件以上合格し、科学技術の研究成果論文を欧米の主要な国際会議や学術雑誌等で多数発表して参りました。

国家公務員採用Ｉ種試験に合格しておりましたため内閣総理大臣より辞令をいただき、内閣府科学技術政策統括官勤務併任も拝命致しました。

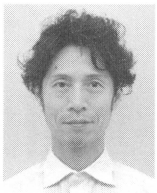
その際は内閣総理大臣官邸と密接に連携し産学官連携内閣総理大臣表彰制度創設等の全主担当の職務に邁進致しました。

もとはと言えば東京大学を卒業し東京大学大学院を修了した生粋の研究者なのですけれども、研究での繋がりを基に先賢にご指導を賜りお陰様で科学技術政策の分野等でも成功に導かれましたのは大変幸いなことでした。内閣府では、米国政府との政府間会合、日米政府間重要情報基盤保護第１回会議等にも内閣府代表として参画を求められ、Washington D.C.で米国の国土安全保障省、国務省、運輸省、商務省等の政府高官の方々と科学技術政策について討議させて頂く機会に恵まれました。この際も、研究での繋がりからもNASAの当時の局長らとの信頼関係を基礎に様々な幸運に恵まれました。海外との連携に関する思い出と言えば、国連Vienna本部で15年に一度程しか開催されない国連宇宙空間平和利用会議に外務省及び国連の試験合格を経て日本代表として参画し、加盟各国代表らと数週に渡り討議し、国連Vienna公式宣言の起草に貢献させて頂いたことも大変良い経験でした。振り返ると新規研究に真摯に取り組んで来た背景と外国語の持続的な研鑽から科学技術政策や科学技術外交の扉が自ずと拓かれて参ったようです。今後もこうした姿勢を大切にしたいと思っております。学生時代より心理学にも深い関心を寄せており伝統ある日本応用心理学会の大会WS等の優れたお取組にはいつも目から鱗が落ちる思いで、深く広く学ばせていただき心より感謝しております。今後とも引き続きご指導賜りましたら大変幸いと存じております。

高橋　正人（たかはし・まさと）／東京大学卒.東京大学大学院修了。元内閣府政策統括官付調査・分析参事官補佐。産学官連携内閣総理大臣表彰制度創設等全主担当。第３回国連宇宙空間平和利用会議SGF日本代表。英検１級、通訳案内士（英語）免許、国際連合公用語英検Ａ級、技術英検Professional級、Technical English Proficiency Test１級等取得者。総務省認定第一級陸上無線技術士、同第一級海上無線通信士、同航空無線通信士。公益社団法人日本工業英語協会理事、日本実践英語音声学会理事。豪州連邦科学アカデミー科学技術賞等受賞。

催眠メカニズムの研究

清水　貴裕
（東北学院大学）



私は主に、催眠の心理臨床的効果に関する基礎的研究を行っています。催眠と聞くとアヤシゲな感じが漂うと思うのですが、催眠療法の歴史は古く、現代の心理療法の多くに見られる対話による治療の源流となっています。とはいえ、臨床心理学を専門としている方々や心理療法を実践している方々にも馴染みは薄く、マイナーな研究領域です。

催眠の研究領域のひとつに、催眠のかかりやすさ（被催眠性と呼びます）の個人差にかかわる要因に関する研究があります。これまでの研究では、被催眠者の性格的要因や催眠者の技術や催眠暗示の提示方法といった環境的要因など様々な検討がなされています。こうした中で私の研究では、被催眠者が催眠に対して持っている態度や信念といった催眠に対する捉え方が、被催眠性の個人差に及ぼす影響ついて検討しています。

私の研究では、催眠を経験したことのない人々に、「人が催眠にかかるとどうなると思うか？」と催眠状態について持っているイメージ（信念）を調査しています。調査の結果から、催眠状態に対して、「自分自身ではないように感じる《解離離人様体験》」、「自分のコントロールを失って催眠者に操られる《自己コントロール喪失》」、「リラックスできたり、イメージ力が高まったりする《治療的期待》」、「普段ではありえないような能力が出る《普段以上の能力発揮》」の４つのイメージがあることが明らかになりました。

この調査を受けた人々に実際に催眠を体験してもらい被催眠性を測定し、催眠状態について持っているイメージとの関連についても検討しています。これまでの研究で、被催眠者が有している催眠状態に対するイメージの違いは、被催眠性に直接的に影響するのではなく、催眠に対して有している態度や性格的な要因などを介して影響を及ぼしていることが示されています。また、有している催眠状態に対するイメージの違いは、自身が催眠暗示に反応したことをどのように受け止めるかという主観的な解釈に影響することも明らかになりました。

催眠の臨床実践では、クライエントが催眠や催眠状態に対して有しているイメージは催眠療法の効果に影響することが指摘されています。今後は、こうした治療的効果と催眠状態に対するイメージの関連を明らかにしていきたいと考えています。また、催眠療法の治療的効果や治療メカニズムを明らかにすることで、様々な心理療法に共通する効果のメカニズムを明らかにすることもできるのではないかと考えています。

清水　貴裕（しみず・たかひろ）／筑波大学大学院博士課程心理学研究科単位取得退学。博士（心理学）。臨床心理士、公認心理師。秋田大学教育文化学部を経て、2018年４月より東北学院大学教養学部准教授。

6 社会の具体的な問題解決に資する

学会賞選考委員会 委員長 木村 友昭

平成19年（2007年）、本学会編集による「応用心理学会事典」が丸善から出版されました。その序文「刊行によせて」には、「現代の心理学はその研究領域もきわめて広く，人間行動のあるところすべて心理学の研究分野であるというほど，私たちの生活に密着した学問になっています。そして，心理学の研究は社会の具体的な問題解決に大きな役割を担っているのです。」と書かれています。さらに、「心理学の研究が社会の具体的な問題解決に資することを目指し」、本学会が設立されたと述べられています。これらの文章は、本学会ホームページにおける「応用心理学とは」にも掲載されています。

学会賞選考委員会は、「応用心理学研究」に掲載された論文の中から、理事・監事の推薦をもとに優秀な論文を選考し、常任理事会に答申しています。そのときの判断基準の一つが「社会の具体的な問題解決」に役立つかどうかということです。

本学会は、多彩な領域の専門家が集まっています。おそらく、本学会だけしか所属していないという会員の方は少ないのではないかと思われます。私自身は、心理学出身ではなく、社会医学系を専門としています。所属学会は、日本公衆衛生学会、日本統合医療学会、日本児童青年精神医学会などです。心理学出身の方は、日本心理学会やご自身の専門に関連する心理系の学会にも所属されているでしょう。会員の皆さまが所属されている別の学会で獲得された知識や情報が本学会での発表にも活かされていることと思います。

私個人にとって「社会の具体的な問題」は、健康問題であり、医療・福祉の課題であり、超高齢社会を迎えたわが国の諸問題です。会員の皆さまは、どのような問題（課題）に取り組まれていますか？「メンタル・ヘルス」「教育」「災害」「犯罪」「労働」「交通」「格差」「ジェンダー」「スポーツ」などなど、多彩なテーマに取り組まれていると思います（網羅したつもりですが、「など」の領域の方は、ご容赦ください）。学会賞や優秀大会発表賞は、ゴールではありませんが、皆さまの取り組みに対し、花を添える存在として、引き続き活動を行ってまいります。

木村 友昭（きむら・ともあき）／ 1957年、広島市生まれ。東京大学農学部卒、広島大学大学院医歯薬学総合研究科修了、博士（医学）、応用心理士。現在、一般財団法人MOA健康科学センター理事・主任研究員、広島大学医学部客員講師。

7 事務局だより

市川 優一郎 事務局長（日本体育大学）

今年度、日本応用心理学会事務局といたしましては、定例の業務に加え、年会費徴収方法の見直しを行いましたので、以下にご報告とお願いを記させていただきます。

現在、会員の皆様からの年会費については、指定口座への振込という形で徴収させていただいております。しかし、従前よりその徴収方法が常任理事会の懸案事項のひとつとなっておりました。そこで、2019年度第１回ならびに第２回常任理事会での慎重な審議の結果、「会員の皆様へのサービスの向上」の一環とし

心理学における実践 ―現場研究の発信とその課題

田中 堅一郎
（日本大学）

日本応用心理学会第84回大会へ自主企画ワークショップとして「心理学における実践 ―現場研究の発信とその課題―」を２日目午前10時より開催しました。

実はこの企画は、私（田中）の所属する日本大学大学院総合社会情報研究科（以下、GSSCと略記）の特別研究指導（ゼミナール）での討論から生まれたものです。GSSCは社会人を対象とした通信制大学院で、1999年に博士前期課程、2002年に後期課程が開学しました。院生はほぼ全て自分の仕事を持ちながら大学院で自分の研究を行っています。

私のゼミのメンバーは職場での様々な心理学的問題や課題について研究し、１ヶ月に一度の頻度で行う「定例会」と称した勉強会に集まります。その会で研究の進捗報告以外にしばしば論議となるのが、社会人大学院生（あるいは修了生）として職場や組織でデータを収集することの困難さ、自分の業務を行いながら研究する時間を捻出する困難さ、（研究所に所属していない、あるいは年齢的に『若手研究者』でもない）「民間の社会人」であるがゆえの研究資金確保の困難さ、職場の現状や実態を多くの心理学研究者は本当は理解していないのではないかという疑念、などです。しかも、こうした話題は、社会人大学院生の「ぼやき」で終わってしまい、多くの学会会員の方々には理解されていないのが実情です。そこでこうしたGSSCの研究指導者でもある私が、彼らのこうした声を少しでも学会大会参加者の皆様に伝えたいと思い、今回のワークショップを企画したのでした。

このワークショップで話題提供者（西山浩次さん、村田教枝さん、小林敦子さん、二瓶哲さん）には、ご自分の研究課題の概要だけではなく、研究遂行にまつわる問題、あるいは研究課題とご自分の業務との繋がりを積極的に取り上げて頂きたいとお願いしました。話題提供の内容（「キャリアコンサルタント養成講座での学習経験の効果」「看護・福祉分野における一視点 ―心理学研究の実践―」「職場のジェンダー・ハラスメント低減への試み」「学術研究と実業現場をより近づけるために ～研修インストラクターの立場としての提言～」）は様々でしたし、持ち時間一人15分程度では、自分の言いたいことを伝えるには制約がきつかったかもしれません。今後もGSSCの大学院生（および修了生）が本学会で「物申す」ことができるように、私も陰ながらサポートしていきたいと思っています。

▲自主企画ワークショップの話題提供者（前列）と私（後方）

田中 堅一郎（たなか・けんいちろう）／ 1960年 福岡県北九州市生まれ。日本大学文理学部心理学科卒業、日本大学大学院文学研究科博士後期課程修了、博士（心理学）。2003年 日本大学大学院総合社会情報研究科助教授、2007年より同大学院教授。専門：産業心理学、組織行動。

日系カナダ人の歴史とリドレス運動

上瀬　由美子
（立正大学）

昨年（2018年）度、カナダのバンクーバー市にあるサイモン・フレイザー大学（Simon Fraser University）で訪問研究員として１年間過ごしました。滞在中は、矯正施設の視察や、日本人移住者へのインタビュー調査など、毎日忙しく飛び回っていました。

カナダの多文化主義と日系カナダ人の歴史

カナダは世界で初めて多文化主義を憲法に掲げ、現在でも積極的な移民・難民政策を取っている国です。日々のさりげない生活の中に、民族的背景の異なる他者との交流を楽しみ、多様性を社会の強みとしていこうとする雰囲気が溢れていました。近年は中国、フィリピン、インドなどアジアからの移民が多く、バンクーバー市の隣のリッチモンド市は、人口の6割以上を中国人が占めています。

そのようなカナダですが、1960年代までは白人優位の移民政策がとられ、民族差別が強く残っていました。アメリカで第二次世界大戦中に日系人が強制収容に入れられた話はご存じの方も多いと思いますが、カナダの日系移民も当時、同様の状況におかれました。戦前の日系移民の多くは、バンクーバーのあるブリティッシュ・コロンビア（BC）州に住み、日系人街を形成して栄えていました。しかし1941年に日本が真珠湾攻撃を行うと、カナダでも、日本にルーツをもつ人全てが「敵性外国人」とみなされ、財産を没収されて強制収容所に入れられたのです。その数はおよそ２万１千人。そのうち75%はカナダ国籍をもつ人々（日系２世や３世）でした。しかもアメリカと異なり、カナダでは戦争終結後も日系人は生まれ育ったBC州には戻ることが許されず、日本への追放かロッキー山脈以東に移住するかの二者択一を迫られました。BC州への帰還が許されたのはそれから４年後でした。しかし、ようやく戻ってみると自身の土地家屋や財産全ては安く売り払われて別のカナダ人のものになっていたのです。この強制収容により、戦前にあったバンクーバーの日系人コミュニティは壊滅しました。大戦中に同じように敵国となったドイツやイタリア系の移民においてはこのようなことはなく、日系人に対する迫害が差別であったことがわかります。

現在、カナダでは日系移民の方々を中心にして、強制収容体験を語り継ぐ活動が熱心に行われています。滞在中に、その中心人物のひとりであるケイコ・メアリー・キタガワさんにご自宅でインタビューをする機会に恵まれました。とても優しい小柄な女性で、ご主人とともに私を歓待してくださいました。二時間近くお話をうかがいましたが、当時受けた差別のあまりの厳しさを知り、涙があふれてしまいました（メアリーさんは日本のテレビ番組でもその活動が紹介されています）。

日系カナダ人のリドレス運動

カナダ社会は戦後しばらくして、多文化主義へと大きく方向転換していきました。きっかけはケベック州のフランス系住民による独立運動でしたが、結果として1971年に国策として多文化主義宣言を、1980年代には多文化主義を明記する新憲法公布と社会規範が変化していきます。この時期、日系カナダ人社会においても、過去の強制収容に対する謝罪と補償を政府に求めるリドレス運動が活発化していきました。「リドレス（redress）」とは改善や救済の意味で、日系カナダ人のリドレス運動では経済的損害に対する補償とともに、政府の正式謝罪を要求しました。この運動は日系３

日本応用心理学会の入会申込書を次にご案内しますので、入会を希望する方はお申し込みください。
このページをコピーし必要事項を記入して、学会事務局宛までご郵送ください。

日本応用心理学会入会申込書（一般・院生・学生）注2，注3

		申込年月日	20　年　月　日
フリガナ		推薦者（会員）注6	
氏　名			㊞
ローマ字		性　別	男・女
		生年月日	年　月　日
現住所	〒＿＿＿＿		
	電話番号	（　　）	
最終学歴	〔　年　月〕【在学中のものではなく，卒業あるいは中退・修了について学科名まで】		
所　属注4	名　称		
	所在地	〒＿＿＿＿　電話番号＿＿＿＿（　　）	
	職名 現学歴	【職名の場合には年数，院生の場合には課程・専攻，学部の場合には学校名・学年】	
研究領域注5	テーマ		
	原理　学習　認知　感情　教育　発達　人格　臨床　福祉　相談　健康　看護 医療　犯罪　社会　文化　産業　交通　災害　スポーツ　生理　行動分析　調査 統計　その他（　　）		
メールアドレス			
備　考			

※申込用紙の個人情報は、学会活動や運営上必要な事務連絡、本学会の事業目的達成のため以外に利用されることはありません。

記入上の注意

注1．楷書で正確に記入してください。
注2．申込書の上部に書かれている会員種別で，希望する会員の種類を○印で囲んでください。
注3．一般会員，院生会員の入会資格は，会則第4条第2項に次のように定められています。
　一般会員，院生会員の入会資格は，次の通りとする。
　(1)四年制以上の大学で心理学およびその隣接分野を専攻した者
　(2)一般社団法人日本心理学諸学会連合が認定する心理学検定1級合格者で22歳以上の者
　(3)第1号に準じ常任理事会が認める者
　　(1)の隣接分野とは以下の分野を指しています。
　　教育学，児童学，人間関係学，体育学，社会学，社会福祉学，芸術学，宗教学，医学（心身医学，精神医学，行動医学など），看護学，経営学，認知科学（人口頭脳など），人間工学，など。
　(1)の入会資格に該当しないと判断される場合は，備考欄に高等学校卒業後の学歴および職歴（年数）をできるだけ詳しく書いてください。(2)の入会資格にて入会を申し込まれる場合は心理学検定1級合格証のコピーを添付してください。(3)の第1号に準じるものと認めることができるかを判断する資料とします。記入欄が不足したときは別紙に書いて添付してください。後日さらに詳細な資料を求める場合もありますのでご了承ください。
注4．社会人学生の場合には，在学大学（大学院）名等詳細を備考欄に記入してください。
注5．研究領域は，主な3領域を○印にて囲んでください（3つを超えて○印を付けてもかまいません）。
注6．推薦者を必ず書き署名・捺印をもらってください。推薦者がいない場合には，理由書を添付してください。

事務局受付〔　　〕審査〔　　〕本人連絡〔　　〕会費納入〔　　〕

JAAP

The Japan Association of Applied Psychology